

意 藉 欠 臨

上田秋成 作
宮崎三昧 校訂

藤篋冊子 全

通函
雁書

東京日吉丸書房

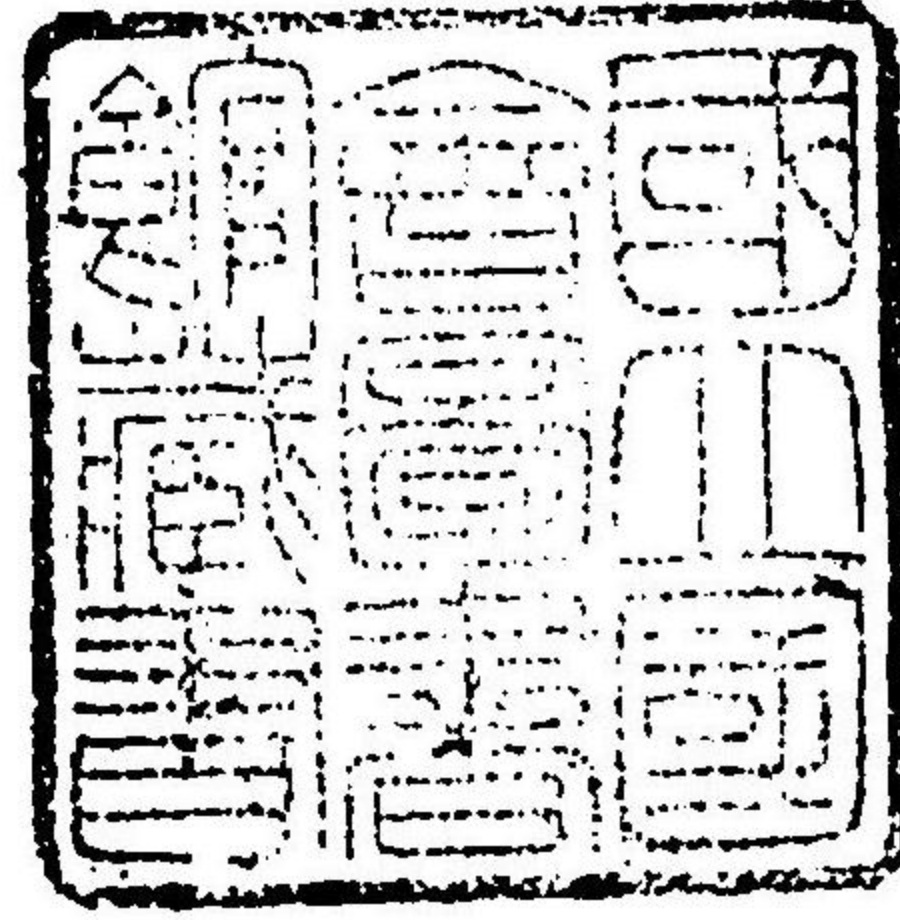
914.5 U1495 M

奇籍大觀第一卷籐篋冊子附言

無腸翁傳

村瀬栲亭

吾友無腸翁、狷介峭直、富貴ヲ視ルコト腐鼠ノ如ク、俗士ヲ以テ
 蟻垤トナス、世俗其病ヲ忌ミ、畏レテ而シテ之ヲ避ク、其門ニ遊
 ブ者、厘々如タリ、然レドモ一毀一譽、翁ニ於テヤ何カ有ラム、
 翁初メ城中ニ住ス、其擾々ヲ厭ヒ、遂ニ瑞龍山中ニ苦茆シ、一裘
 一葛、疏糲自ラ安ンズ、翁博聞強識、過眼誦ヲ成ス、是ヲ以テ一
 書ヲ蓄ヘズ、室中唯二三ノ茶具アルノミ、最モ國字文章及國風ノ
 詩ニ長ズ、興到レバ、則チ一日數十百篇、言口ヨリ出ヅレバ皆文ヲ
 成ス、著ス所數種、已ニ世ニ行ハル、又萬葉集訓詁及筆記、八十
 餘卷アリ、一日其徒ニ命ジテ、之ヲ廢井中ニ湮メシム、余之ヲ聞



260887

クヤ遅シ、奪ヒ去テ之ヲ名山ニ藏スルコト能ハズ、嘆惜スレドモ
及ブ無シ、後翁ニ値ヒ、其故ヲ詰ル、翁笑テ曰ク、一時ノ漫筆、
意未ダ盡サル者頗ル多シ、然レドモ年力頽侵、區々トシテ鉛槧
ノ業ニ就クコト能ハズ、且夢中夢ヲ説テ癡人ニ向ハンヨリハ、井
ニ投ジテ我魂ヲ清ムルニ如カズト、(原漢文)

以上村瀬栲亭の上田秋成傳なり、秋成一號を無腸翁といふ、
栲亭は秋成の親友なり、親友の言此の如し、秋成の狷介なりしは事
實なり、されど又其一面に於ては、極めて飄逸洒落にして、幼げに
愛すべき所ありき、當時の人、徒らに其狷介を疾んで其飄逸を認め
ず、此稀世の文士をして失意不遇に終らしめしは、實に痛むべきの
極なり、栲亭の傳にも見え、又本集の附言にもあるが如く、一毀一
譽は素より翁の介意する所にはあらざるべけれど、猶時に不平鳴を

もなさいるにあらざりしは、左の數首の歌を見ても知るべし、

九重に八重降つめるしら雪の下に埋れて老や朽なん

沫雪のあはれは老か思ふ事つむとはすれと下崩れして

我を知る人しなれば我知らぬ人に見すへき言草もなし

翁の世俗に忌まれしは

たのめこし壁の隣のともすれはあふささるさにうたて世の中
かゝる稟性に因れるなるべし、

其幼げに愛らしき節は、本集載する所の鶉居の記秋成其室と語る條
を見ても知るべく、又流俗に忌み疾まれしさまをも見るに足るべし、
(上略)あなかしこし、さらばいかで斯る物狂ひを見次て、三十年
が程を念じ過させ給はん、我爲の守神にておはしけりと、首を席
につきて手を摺合す、打笑みて、斯う常にも戯れごととしてあらせ

るを、人は知らで、鬼々しとのみ忌み疾まれ給へれ、此御有様、
 さいふ人々に見せ奉らぬが朽をし、とまれかうまれ、かしづき果
 つべきには、うしとも怨めしとも思はで、たゞ、夢路のたどり、
 一夜の草の枕に思ひ過して侍ればとて打しづもりをる、(下略)
 翁姓は上田、名は秋成、初め東作、後餘齋と稱す、無腸翁及び剪枝
 畸人、わやく太郎等の別號あり、(剪枝、わやくの二號は、専ら戯作
 に用ゆ)浪華の人、攝の長柄、京師等に移居し、晩年南禪寺中に住し
 て終る、いつも其居を鶉居と號す、鶉は常居なしと云ふによれるな
 り、南禪寺中の居は、疊數八疊ばかりの小屋にして、入口に麻の暖
 簾をかけ、自筆にて鶉居と記したるよし田能村竹田の筆記に見ゆ、
 文化七年歿す、壽七十八、南禪寺中に葬る、翁自製の肖像今尙同寺
 にあり、

最も親交ありしは小澤蘆庵とす、左の贈答を見て知るべし、
 年の暮には、いつも炭を切て贈らるゝに、よみて返

せし歌

秋 成

埋火のすみつき難き都にも思ひをおこす友はありけり

返し

蘆 庵

思ひやる甲斐こそなけれ埋火のすみつきてたゝ久にあれこそ
 大田南畝もまた浪華祗役の際邂逅して、迭に知己の感あり、よりにて
 翁に南畝子の東行を送る歌あり、南畝に長夜室の記及藤篋冊子後序
 あり、(南畝生涯二大人物を江湖に紹介す、曰く横井也、曰く上田
 秋成)

長柄の居に盗人入りて、聊かある財を奪はれ、其入りし壁の毀れを
 窓に作りて盗窓と名づけたるなどは、最も飄逸洒落の稟性を見るべ

し、但し斯る類の逸話、本集中に詳しければ一々擧ぐるに及ばず、總べて本集は翁の全集にして、亦翁の本傳に充つべきものなれば、讀者宜しく就て其高風清標を窺ふべし、傳本世に稀なり、覆刻する所以なり、

翁學系は古學にして、加藤宇萬伎の門に出づ、歌は萬葉を私淑し、夙かに時調に殊なり、文章尤も卓絶、時に小説家の口調あり、篇中十春詞、劍の舞(靜御前の逸事)、月の前(西行法師の逸事)等は、卓絶中の卓絶なるものなり、

本集を校刻するに際して、多く吾友紫陽安藤直方子の援助を籍る、こゝに明記して其勞を謝す、

宮崎璋臧

林にあそぶ鳥のやどりところえて、おひさかゆる本草の花、人の友垣のかたらひも、おのれくがこのめるにひかれてこゝろはゆくめり、ちゝ母に別れたいまつりての世には、うからはらからたのみつべきがおほかめるにも、思ふをあかし憂さうれしさをかたりなぐさむなんいと、ほしき、たいまがりねぢけだにせずは、おのがむきむきしわさいかさまにもあれな、今や老らくの世にかへり見れば、この入江の蘆が散る夕風、心さむらにおほし、ゆりしをも、大かたにさいだてたりしに、たいひとり世にとゞまれるは上田の翁なり、我には齡いつゝばかりおくれたまへど、よろづにこゝろさとく、兄とも推ゆづるべかめる、常に國ぶりの歌をよみてひとりたのしとせる、其した書めくものあまた、つゝら箱につみ入れ、我まへにもて来て、これなん年月に菊つみし磯廻の藻屑なり、もとより蘆原のし

げき小屋におひ出て、ひちりこにそみたるあやしのこと草は、久方のあふき望む御あたりには、あま彦のよびつたふましく、またおなじ民草の中には、ほむともおとしむとも、なに心してとおもへば、ひとつものに耳過しつゝ年は經にけり、君と我、土をつみて城をかまへ、竹にまたがりてかけはしりし昔より、何のたがふ節なくて、相おいの今までゆきかひ問かはしぬるには、歌よませたまはずとも、おのがひがこゝろをしられまゐらすには、見せたいまつりて、ひと言をだにをかしとおもはれなんいとうれしき、見をへて後に、はし一くだりにも書くはへてよと聞ゆ、あなわづらはしとはおもふおもふ、百たらずのとし波よせかへりて交らひし人のためには、國つ罪こそかしこけれ、我犯さぬ天つ罪を老が瘦ぼぬいたきまでおほせらるゝともとてなん、かしら髪禿なる筆に、此こと打出こそすれ、

歌やふみや露ばかりも學ばぬみちは、みよし野のよしとも、あしがらねのあしかるとも、あげてはいふべくもわらぬを、古ことの葉にならひてぞ世人さだめよ、世ひとさだめよと云ふ、享和二年の秋、ふなきほふ堀江のわたなべの岸なる生島の叟記す。

附言

一、此集は、翁時々のあはれにつき、且事に臨みて口すさばれし、歌や文や、物話、道ゆきぶりを、紙のはし、ものゝ裏などに、かいつけられしを、取つどへて、えらぶとはなしについでられたる也、この比かたりたまはく、思はずよ、七十と云ふ齡をかぞへつめるは、うつゝの夢路のたどりや云べき、いでや、今歳を老が世の限りに、打みだりし事ども皆しをへ、筆とるわざも、かしこきながら、獲麟のためしに、けふよりのちは、きのふの我にはあらで、みどり子のわきまへしらぬ遊びして、世をのどかにも終らばやとて、その御寺に、おきつき所をさだし、かつ柩をさへつくらせて、此ふみ等をも、した書のまゝに納めてんと、うちくおきて聞ゆ、おのれ、翁にしたしく交り遊ぶなべに、はしとく讀

見し事のあれば、翁をしれる人々と心あはせて、是を櫻木にさかすべくとてなん、御寺にまゐりて、はかりことすを、翁聞つけて、うたて、をこわざするかな、世にはひわたらんほどは、必しも有まじきわざ也とせいせらる、いなや、此ぬしはすでに世を見はてて、今はおはさずとこそ聞つれ、我もの顔にのたまへる、いとあやしきと云ふ、翁打もだして、我刀に疵かうむれるよとて、長き息つきつ、ゐざり入たまひぬ。

一、ふみの名の由は、常に机のかたはらに、あさらなるつゝらごをかのおき、人來たれば見せじとしかまへらるゝを、れいの翁がつづらごよと、ねたくいひあへりしもて、今は呼ぶことゝなりき。

一、歌や文や、翁の齡にしてはいと少きは、わかておはせし昔は、よろづ打たはれがちに、まめくしき道に心ざしもあらざりき、

四十と云ふ年より、よみ書ならひしといふ物がたり、べちにまち文と題せられし一卷あるを、こは恥あることいもありとてゆるしなし、さは四十を初めの手習の、それすら黄岐の術のいとまを偷みたる遊びなれば、うべも多かるまじく、大方はしるしもといめられざりしを、七十をかぎりのわざに、つゝらごの中、又こし方かゝることのありきなど、むかし今、前しりへなく書なめつゝ、猶その所の障子にかゝるを見し、誰屋の壁になど、友垣の告聞ゆるをもかきあつめつゝ、六まきとなりき、翁、此道に門をひらきて、しるしらぬをいざなふにあらねば、よしやあしやのほめそしりをもいとはれぬもて、其人がらをも世の人見たまへかし。

一、木にのぼすまじき卷々猶多かれど、ゆるしなきには、題號をだも書あらはさず、翁の常言に、命はかぎりあり、知るは涯なし、

かぎりあるをもて、かぎり無きにしたがふは危しと云ふ古ことを
ずんじたまへる、うべことわりとは聞つる也。

文化紀元三月是の日、昇道杜多、岡崎の竹間裏にしるし侍る

自序

古人云。文章窮而後工。非窮之能工也。窮則門庭冷落。無車塵馬足
之矜。事務簡約。無簿書酬應之繁。親友斷絕。無徵逐遊宴之忙。生
計差澁。無求田問舍之勞。終日閉門。兀坐與書爲仇。欲其不工不可
得已。不獨此也。貧文勝富。賤文勝貴。冷曹之文勝於要津。失路之
文勝於登第。不過以本領省而心計問耳。到聖人。拘囚演易。窮厄作
經。常變如一。樂天安土。又不當一例論也。適有此語。聊足以暢間
情焉。頃一夜夢。垢面短鬚之老翁來云。兄也薄命不遇。去鄉土離六
親。無居無產。自恣爲狂蕩。而乘間作文。然句々皆寒酸憂愁。世塗
之人誰不以蔽目哉。夫前人慷慨之言。各自愛才舞文。解悶發憤者矣。
兄也不然。居常讀書有感。將以安不遇乎。抑亦遇不遇。共天地間之
動物。人票之性。不可以爲如何已。故來慰問云。覺後思之。冷落失

路。爲之窮厄。則不可樂。爲之命祿。則何以憂耶。余之薄命。及老而無居無產。惟是愚盲淺識之歎。終日閉門。兀坐乘筆。雖不勝富勝貴之文。聊以爲消閒之策耳。享和壬戌晚春。鳴塘頭乞丐翁鶉無常居士。拭盲眼書之。

浪速 竹陽森世黃書

藤篋册子目錄

第一 歌集

藻屑 屏風歌七十首

第二 同上

同 春夏秋長短合體三百七十餘首

二之餘同上

同 冬雜長短合體三百餘首

第三 紀行

秋山記

第四 文集

落葉 十雨言二篇 花園 年木

御嶽さうじ 初秋 中秋 月の前
舞の舞以上十章

第五 同上

水無瀬川 郝廉留鏡 古戰場 聽雪二篇
傲李白春夜宴桃李園序 ふる郷 傲韓退之送李愿歸盤谷序
硯銘 風鈴 枕の硯 雨蛙 旌孝記以上十一章

第六

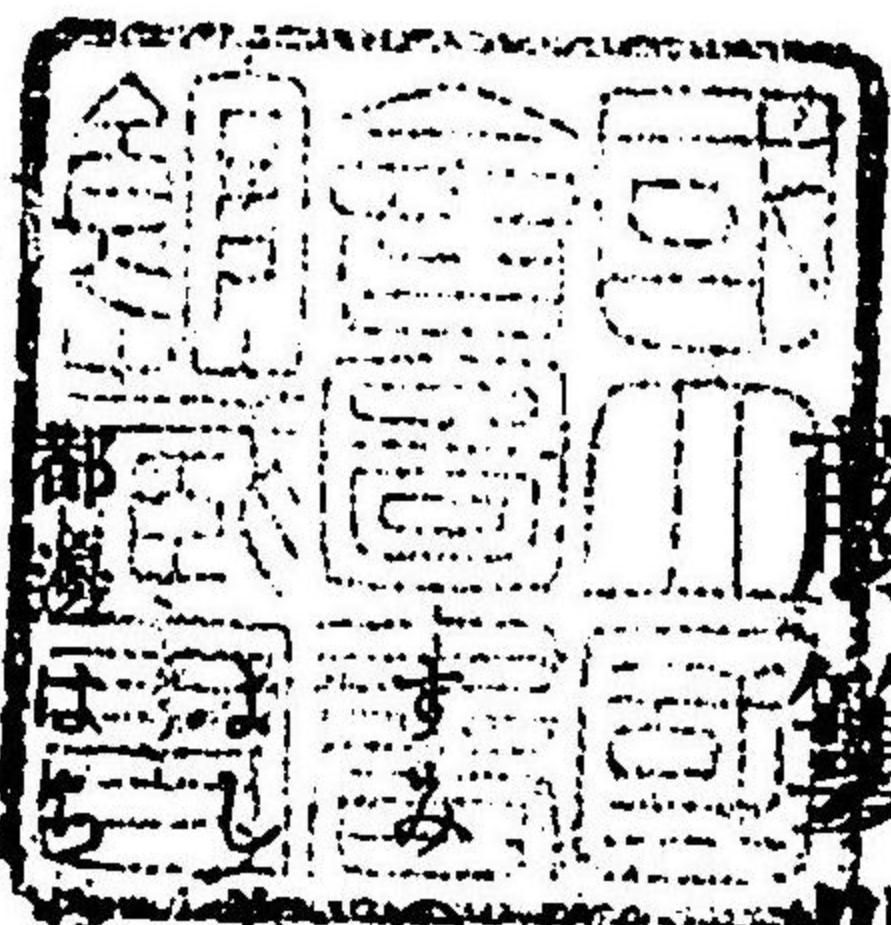
鶉居 其二 紅梅 嵐山夕曉篇 秋萩
枕の流 三餘 よもつ文

附録

露分衣 夏野の露 珊瑚尼之遺作合十章

藤篋册子卷一

題云藻屑



すみの江の浦のはま藻のよる時々なること草ともを、荷田の信
よし美の家の屏風に、えらふとはなしにかいすさめる歌
都邊はらまたの柳園の梅かへり見多き春になりけり

大原や春日の神もゆるさなん子日の松は森のした草
我宿の梅の花さけり宮人のかさしもとむと使こんかも
折はやと立よる梅に鶯のゆるさぬ聲をおとろかすかな
とのい人よるをすからの梅香のしきりに薫る明や近けむ
思ふ人こんといふまに梅の花けさの嵐に散初めにけり

花林隴月

櫻さく春の林は久方の月のかつらもはなれりして

禪林寺にて

さくらさく此山陰の夕曇空さへ花のいろにまかひて
高砂のをのへにたてる櫻はなはよも嵐のさそひやはせん
夕日影かゝやく峯のさくら花けふもなかくめてくるゝ庵哉

大田南畝子のあつまにかへらるゝを送る

風あらしき木曾山櫻この春は君を過してちらはちらなん
あほの山をのへの櫻尋来ていせまてと誰も思ひこゆらん
故郷を荒るやと訪へは萱草すみうくもあらぬ垣根也けり
よし野川かはつ妻よふ夕暮に宿かる我もひとりねにして
宮の中は男をみなも白袴の衣ゆゝしみ夏立ちにけり
郭公夕かけていつも朝妻の片山岸になくといふなり

曇り日のいはせの森の時鳥あなかま鳴てうとむとも聞く
橘のみえりの里の時鳥ぬかぬ玉なる音をもなくかな
鶯の古巢の谷は氷とけいつか青葉のかけとなりなき
かく山のをのへに立て見わたせは大和國原早苗とるなり
さなへとる時には成ぬをとめらか難波すか笠紐はつけてん
五月雨は降るともゆかな墨江のみとしろ小田の早苗取見に
山彦のこたへて悲し我岡の照射のねらひあやまたぬかも
けふも又よそにと見しを上蔀おろすまもなき夕立の雨
あすか河嵐吹そふ夕立にたきちなかるゝ淵瀬はなしに
なてしこの花の盛の久しきに初秋風も吹くといふなり
藤原の三井の清水はむすはなむ天の香山かけも見えけり
初秋の朝けの風を身にしめて思ふにかなふ比にも有かな

女郎花さか野の原に堀つれてたか宮つこそ夕いそきする
男花ならぬかたこそなけれ大原や野中古道分まよひては
大空に光みちぬる秋の夜も月のところはさやけかりけり
紀の海の南のはての空見れば汐けにくもる秋の夜の月

かふ内の國くさかの里に在し時

生駒山影また峯に別れぬを浪花の海は月になりけり
出て入る山の彼方のをちこちに身をし分ても月を見てしか
天原秋の夜わたり照月のひかりをさまるあかつきの空
蘆かちる秋の入江の夕やみに光とほしくとふほたるかな
此夕へ雁鳴わたる山城のふしみのわさ田刈やそめけむ
信濃路を迎へこしより荒駒のあらし心もなれもこそすれ
御狩野はきのふと過し草村にいつちのかれてなく鶉かな

四

袖たれて秋の外山を眺むれば紅葉にけりな時雨せぬまに
津の國のこや野をゆけは露霜に小草花さき葉は紅葉せり
峯にたつ鹿の八聲のひまはたゝ紅葉吹おろす風の音かな
秋よりもしくれくゝて木枯の冬にうつろふ雲の立ちまひ
松か崎にて

時雨の雨早くも降て大比枝やをひえに懸る雲と見しまに
奈良に遊ひし時

春日野の時雨の後のけふなれや山は皆から紅葉しにけり
高雄山

奥山の岩垣紅葉このころはあした霜おき夕へ散かふ
枯かつらたくれは絶る百濟野の萩の古枝の眞柴ゆふとて
はふり子か清むる跡に木葉散て神のみたらし氷ぬにけり

五

枯草原晨霜

此朝け茅生も薄も枯ふして霜の原野は見るへかりけり

井中住せし時

寒き夜を明しかねてそ今朝見れば生駒嶽に雪のつもれる
舟きはふ音も聞えず堀江河かきくらしふる雪の夕へは
こやの野に宿りてましを夕つけて降雪悲しむなのふし原

雪峰寒月

有明の月の光は埋もれて峰しる妙のゆきのふりはも
御幸待て野山の神もつかふらし鳥立もらさぬ朝かりの場
廣澤の水にうさねてをし鳥の羽さる音を聞く夜さむしも
田上の河への家に宿からんあしるの波に千鳥しはなく
宿りする宇治の橋本さよ更て中の河洲になくは千鳥か

かそふれは年はあまたに積つるを猶をさなきは心也けり

鳳闕

思へともおもひやはえん色に香に左の櫻右のたちはな

舊都

古しへの高津の宮にたつ民は萬代までと造りけんかも

里

九重にとなりてすめる里人は宮馴てしも物はいふなり

貴公子

よき人の長き心は初春のうらくてらす日かけなりけり

武士

弓矢おひいさ駒なめて物のふの花見かてらに鳥狩する岡

墨染に裁ぬふわさのなくもかな浮世の門は明すあらまし

八

市買

畝火山木末にさわくあさとりのさきに群たつ輕の市ひと

散人

花鳥の色にも音にもほたされて暇ある身のいとまなき哉

松

足引の遠山松を見さくれは嵐にたへて年もへにけり

浪にふし岩根にたてる松の聲須磨のうらやま昇り降り

風をいたむ渚の松に波かけて下葉のもみち沖に出にけり

古葉おち霜にはまたき凋まねは秋こそ松の盛なりけれ

つゝらふみ

春歌

立春

久方のはてなき空に朝霞たなひき渡りはるたつらしも

春霞立野の野への神やしろむかふ朝日はけふをはじめに

去年よりも姿を見せてけさを鳴くたけの林の鶯のこゑ

立春霞

風はやき山はけしきを立かへて横川がの杉に霞たなひく

我こそは面かはりすれ春霞いつも生駒のやまにたちけり

迎春東郊

九

ひんかしの野に出て見れば錦織の近き里からけさは霞める

田舎住せし時春のあしたに

長閑なる日影はもれて笹竹にこもれる庵も春は來にけり

春盤に五穀を盛てくはへし歌

うけ持の神代なからの田なつ物としの初に見るか楽しさ

元日に子日ありし年垂水の神岡に松ひきて遊びし歌

神祠在本國豊島郡

あらず玉の、年のあしたに、めつらしき、初子のけふを、むなしくも、宿にはあらじと、新草の、もゆる野こえて、岩そくく、たるみの神の、岡のへに、上りて見れば、遠山は、霞に匂ふ、朝雲に、田鶴なきわたり、遠しろき、三國の河に、舟よはふ、人しも見えす、瑞垣の、下ゆく水の、音さむみ、衣をさむみ、刀自も我も、五十がうへ

の、百足ぬ、老にしあれば、我爲に、おふる小松の、根をはへて、千本さかゆる、引つれて、しるしもあれやと、菅の根の、永き日くらし、夕雲の、雪をさそへは、風さえて、衣をうすみ、肌さむみ、家路を遠し、かへらなんいさ、

反歌

子日する野邊の小松に降雪の白髪つくまで年は経な、ん

元日宴

けふよりそ事たつ春の位山つきくたまふ千代の盃

白馬節會

今そひく馬の寮のあゆみまであなおもしろの駒と云ふ也

賭弓

眞手つかふ弦音たかしの形的のうらめつらしき春の朝庭

早春歌

みなせ河さゝれに雪の降つみて春の水花した通ふらし
春來てもとけぬ汀の岩むらにいつ波かけて氷るにけむ
春の雪あかきにくたき信濃なる菅のあら野の駒いさむ也
雪とけし岩田の小野の春日影道ゆき人も若菜つむらし
仇守る飛火絶えにし春日野にたゝ新草のもゆるをそ見る
一夜來て旅寝うれしき故郷のあれし垣根にもゆる若草
柳もえ蘆つのくみて津國のなからの堤ひとのいきかふ

梅

此里は梅の林にこめられて薫るものとも知らずそ有ける
江をわたる梅の追風香をとめて花の所に舟はよせなん
おなしくは梅の木本とめてまし埋みそまとふ春のたき物

梅の花香にかをらすは霞とめ雪に埋れてはるもすきなん
かへし着る夜の衣にしめる香は君かこてふに似たる梅哉
雪分て昔の友をとひくれはよし野の里に梅も咲きけり
くもり日はことにそにほふ梅の花風吹とつる深き霞に
鶯の鳴きからしたる朽めより立枝うれしき梅のはつ花
野鴉の羽吹の風にちらされし名残の枝のうめかをるなり
空冴て香こめに風の送りくる雪と梅とをわきて見なまし
梅の花峯をくたりの林には里に出しとうくひすのなく
我岡の林の梅を宮人の酒にうかへてわれにたまはす
山かつのくたく薪にゆるされて立枝あまたの岡への梅
梅花風にちること鶯の笠とられたるこゝちやはする

鶯

高圓の野へ見にくれは新草に古草ましり鶯なくも
 かけろふのもゆる春日の小松原鶯遊ふ枝うつりして
 宿しめてねよけにもあるか鶯の梅のこまくら我に借なん
 春の野の幽の草くき誰見ねとおとろき顔に鶯のなく
 鶯はまぐらの窓に影見えて春日なくさむたけのしたいほ

大寺の門邊にたてる古柳つちはくまてに枝はたれにけり
 九重もちかくやなりぬ道廣きゆくてにもゆる春の青柳
 一葉よりうかへならひし河舟をつなく岸根のたまの緒柳
 紅梅
 此殿の八重のくみ垣枝こえて紅ふかき梅のさかりは
 二月や八重さく梅の紅にうたて灰さす野邊のあくた火

春雨

こちかせのけぬるき空に雲あひて木の芽春雨今そ降くる
 けふ幾日晴ぬ雲間にのとなる日影をこめて春雨そふる
 面しろく雨ふるからに春の夜を短しと思ふ初なりけり
 春雨に着ならし衣かたしきて柴のおき火を埋みかねつも

菴春雨

稀にとふ人をやとして春雨のよるをすからに語る庵かな

春雨枕に雫す

春の夜の雨もる山にやとりして枕にちかき雫をそ聞く

春月

みよしの、花遅けなる年たにも河瀬おほろに月は霞める
 三島江や玉江の水も濁るなりかすみてうつる春のよの月

しらま弓張てかけたる月影はみつれといく夜はれぬ霞か

桃花

春の水あさくなかる、片岸はもゝの林のやまもとの里
折花におなし色なりあら染のあさらの衣まくり手にして

春日遊墨江すみのえ

蘆原の、みつ穂の國を、中におきて、外行く波の、千重浪の、ゆた
のたゆたに、五百津船、千船をのせて、神代より、天のさくめの、
跡とめて、入くる船は、玉はやす、武庫山風を、追風に、夕はなし
て、明たては、生駒高峯を、吹おろす、嵐のかせに、朝ひらき、漕
てそ出る、大伴の、三津の濱邊に、ありたゝす、神の御前の、住江
の、いつはあれとも、春の海、奈吳の浦へに、家わすれ、拾へる玉
を、くゝつもつ、手たゆきまてに、をとめらか、裳のすそぬらし、

みつ汐の、夕さりくれは、あはと見し、淡路の島も、霞こめ、ほの
にも見えず、芦田鶴の、歸るあし邊は、汐さるに、さわく入江を、
漕たみて、行ちふ船は、蚤ならぬ、難波をとめの、家路ゆく船、

反歌

なこの海の餘波の玉藻我からん汐みち來とも沖にをれ波

櫻花

いつはらぬ春の日數をかそへ來て山の櫻は咲そめにけり
卷向の檜原杉むら霞みけりほのに櫻の色にこほれて
ひな曇る櫻かもとを立くれはみとりの空に薰るはるかぜ
思ふことあらぬ枕に花の香のあさらに薰るはるの明ほの
しはしとてたゝすむ花に相阪の關は夕の戸さしせし哉
櫻花さけるを見ればかほよ人衣にとほる光なりけり
さくら戸をおし明かたの空見ればけさも尾上の花曇して

山路花

おくれしとおひこし人にあはぬかな心空なる花の山ふみ
舟うけて誰もの音を遊ふらん嵐の山の花の木かくれ
夜にかくれ遇にし人に花山の道にゆきあふおもなしや我

海邊花

須磨の浦の磯山櫻さきにけり波こもとに立くとや見ん
風待てとまりする舟磯山に咲ちる花の日敷へしかな
汐なれし生田の杜の櫻花春の千鳥もなきてかよへる

雨中花

打むれてきのふは見しを櫻花雨静かなる陰となりなき
さくら花うれしくもあるか此夕嵐にかへて小雨をほふる

客來問吉野之花時答登山兩回山水最奇絶其多花之處坂磴開豁人
跡絡繹可謂清雅之矣思夫上古飛鳥藤原之世々春秋屢行幸美此山

河之美而臨水營宮雖見田獵捕魚之御遊更無望雲踏雪之轍故好古
士到干那處則懷古以永言也又問翁嘗咏花專用那處者如何答凡題
詠春花秋月采摘其地以調風姿猶之生旦上場雖使人歡娛悲淚比之
良人世能動諫則所感固淺矣春花粉飾姝子遇雨忽失其美焉那處山
水最奇絶但遊以花時者俗士耳今教道以數言

其歌

空に見つ、大和島根の、國原ゆ、雲井に見ゆる、みよし野に、打こ
えくれば、遠しるき、河音さやけし、舟よはふ、六田の岸の、柳原、
風に靡ける、河のへを、上りてくれは、花くはし、雲に埋める、麓
邊の、秋津の小野の、岩村の、中切りとほし、行く河は、瀬々にむ
せひて、たさちあふ、水のまに、棹とりて、くたす筏の、岩に
ふり、みたるをあやな、をちこちの、岸にたすみ、我見れば、水

に影ある、山吹の、かさねの衣、とき洗ひ、ほすいとまなみ、山風
 に、櫻吹まき、帯にせる、象の小川の、みなわなし、河瀬に落て、
 瀧波に、亂るゝ見れば、風のみ、ちりやはまかふ、いにしへの、
 かたりにつたふ、とつ宮は、こゝとしきけは、三舟山、常るる雲を、
 振さけて、見つゝしぬへる、夏見河、よとめる末は、ゆふ花の、ぬ
 さの手向か、さなくたり、瀬おりつ姫の、河社、ところくゝに、響
 きあふ、水のたきちも、廣きせに、流れてゆたに、淺花田、深みと
 りなし、木綿疊、千むらの絹は、天にます、たくはた姫の、神わさ
 か、妻よひかねて、夕河に、かはつとよめり、よき人の、よしと見
 ましゝ、みゑし野の、ゑしの、山は、峰高み、河遠しろし、昔見し、
 春の盛を、おもほゆるかも、

反歌八首

芳野川河隈ことに水泡なしよとめる花を昔見しかな
 櫻花うきて流るゝ跡見れば象の小川はまことさやけし
 白雲はあしたに晴れて三舟山夕ゐる峰のかせのしつけさ
 夏見川よとせなからしさしくたす筏か聲のはやも霞める
 河かみの國栖の里人春こすはとはれぬ宿と思ひたらまし
 大瀧をくたけて落る白浪の音は嵐のたえまなきかな
 夕蝦秋をさかりの聲ならはたのめて又も我かへりこん
 宿かさぬよし里ならは秋つもの、岩が根枕夜を寒くとも

題吉野宮

名くはし、よしの、國は、山つみの、守てまぜれば、山なみの、よ
 ろしき國そ、よき人の、よしと見ましゝ、瀧つ瀬は、清き河内そ、
 しかれこそ、大宮人は、春花の、咲のを、りに、鶯の、聲をとめつ

つ、秋霧の、晴ぬまよひに、蝦なく、瀬々を乏み、いきかひて、見れともあかす、遊ひせし、秋つの小野の、とこ宮は、とこにはあらて、夏見川、なかるゝ水の、立やかへらぬ、

反歌

御船山常ゐる雲のつねならは瀧の宮古はいまもあらぬか

禁庭花

山里にあらぬ色香の櫻花かよりかくよりそふひかりかな
御かは水花を流るゝ大宮の内にも春はとまらさりけり

花頂山のふもとに住そめし春

すまで我見やはさためん粟田山泡たつ雲は櫻なりけり

花下遊

石川のこまのたはれ男花に遊ひ主ある人の帯な取らしそ

嵐山花 三章

たには路をくたる筏の岩にふり幾瀬碎けて花はみるらん
大井川くたす筏の跡たえて夕への波に花ちりうかふ
大堰河岸の櫻の影くれて月になりぬる波のひかりは

老木花

年深き櫻か枝は苦むして松を友なるよはひをやへん

山寺花

葛城や高間の山の峰の寺寒き日影にはなもさきけり
あはと見て歸るそはかな少女らか門ゆるされぬ寺の櫻は
谷渡る道はあらねといとふりし寺こそ見ゆれ花に籠りて

古墳花

しめはへし苗代小田に影見えて年ふる塚の花も咲けり

瓶花

瓶にさす花はきのふの山苞を訪来て人のけふも見はやす

山里花

山里は夕暮さむしさくら花散はそめねと匂ひしめりて

愛花篇

打なひく、春去くれは、百鳥の、さまよふ野邊は、新草の、もゆる垣根を、誰しめて、すむ人たのし、あし引の、山の庵に、むら肝の、心すませは、かたらはん、人とほしきを、庭もせに、櫻花さけり、ふ、むより、散はつるまで、風をいとひ、雨をそ怨む、春ことに、我をたのめて、明たては、閩戸遅しと、夕やみは、ほのに見えつゝ、言とひを、我にはすなり、花くはし、櫻のめてと、いにしへの、遠つ飛鳥の、すめらきの、ことあけませし、にきたへの、衣とほりて、

にははせる、神のみことの、ゑまひにも、くらへおとらぬ、花妻の、あれをたのめる、里に出は、人戀よらめ、家にあらは、人とひくへみ、山口に、守部やすゑんと、岩波の、千々にくたけて、思ひをそする、よしゑやし、戀はよるとも、袖はへて、とひもくへきを、朝されは、霞かくりて、夕つけは、霧の籬の、妻こめに、面輪も見せし、かにかくに、遠つあすかの、すめらきの、言舉ませし、花くはし、櫻のめての、姫神の、いろ香おもほゆ、庭もせの、我花妻よ、散こすなゆめ、

反歌

櫻花あかぬなけきを我すれと一夜の風に散るかさふしも
なかゝれと頼みこそせね櫻花一夜の風にちらむものかは

落花

散るまでとたのめし庭の花にうき曉かたのむら雨の音
 櫻ちる木の本見れば久方の星の林に我は來にけり
 とめこしな花に初瀬の山おろし春も烈しき習ひなりせは
 山風の吹とはなしに玉たれの外面に花のけさはちりくる
 龍田彦風を守りの神山におのか時とやちるさくら花
 朝鳥のこゆる羽風に色なからをへの櫻散初めにけり
 よしの山岩のかけ道春ゆけは瀧つかふちに花ちりうかふ
 行かれて獨のみ見る春の夜の月に花ちる志賀の山越
 時鳥なくへくなりぬ花はみな散らせし雨の名残ある空
 櫻花散るを心の果にして残る日數の春は春かは
 根にかへる花としいへは頼まるゝ又くる春も梢にそ見ゆ
 花遅し

花おそき櫻か本をとめくれは青根か峰の外陰なりけり
 けふとくるゝ日數に洩てみ山には遅けにもあらぬ花咲にけり
 花櫻かさねて匂ふ袖の色に春をとゝむる雲のうへ人
 すみれ草
 あすもこん堇花さく春の野の芝生かくれに雉子鳴くなり

雲雀

春の野はひはりの床と思ひしを空にやとりの夕暗の聲
 賀茂の翁のよめりし
 霞たつ春野のひはり何しかも思ひあかりて音をや鳴らん
 是につきて
 冬の野の枯生に交る草の床にいつ立つ空と雲雀鳴くらん
 翁も思ひありけなり我もしかりとや人聞くらんかし

かはつ

夕されは蝦なくなり飛鳥川瀬々ふむ石のころひ聲して
躑躅花

みよしのは青葉にかはる岩陰に山下照しつゝし花咲く
藤花

神松にかゝれる藤も手はふれんいてや引てふ大幣にして
春と夏こなた彼方に咲く藤の花や何れに靡くなるらん

大原野の春日の社に詣てはへりし時、藤の花の、松にいとおも
しろくかゝりたるを、我すさの童の、何の心もなく折つみけ
れは、里の子らか、それは神の木なり、たゞりやあらんと云ふ
に、おとろきて泣きかなしむを、とりて、ふとまへにさゝけ、
よみて奉れる。

折ると見は罪はかしこし大直日見なほし給へ幣の手向に

牡丹を人々とよめる

色にこそ物おもはすれおほけなく國傾けに咲ける花かは

楊太妃一捻紅を

いさゝめの色にそみても其君の面影見する花の名たてに

浅紅

信美

花にそむ人の心の深見草薄くれなるのいろに匂へと

白

布濟

めてたくも咲みてる哉しら重ね粧ひけたかき花の君にて

白帯紅

黙軒

曙の薄花さくら忘れめやはたにのいろに匂はこりせは

深紅

敬儀

呉藍くれなゐの色ゆるされし深見草あてなる種にいかて生ひけめ

朱砂紅

益

まぜの内に朱なる玉や敷きたると見えて花さく深見草哉

紫

間 齋

時めける濃き紫の一本にうへも貴盛しきはなところ見れ

夏歌

更衣

わた殿をいきかふ裾もかるけなり夏立つけふの衣の追風
人妻のこれや卯月の夏衣馴れはかふるならひある世に

新樹

奥深く分しかへさの山口は青葉茂りてなつたちにつけり

いとはやも蟬鳴く陰と聞つるは青葉にこもる瀧の水音

加茂祭

けふてへは高きいやしき葵草かけて神世を忍ひつるかも

加茂山の神のおまへの駿河舞袖に桂のかせもかをれる

かきつはた

身におはぬつかさの色の杜若きぬに摺つけ思ひ出に着む

時鳥

時鳥待つをならひと夕かけて山のいほりに長居せしかな

待またぬ宿をわきてや忍音に小夜杜宇鳴てわたれる

橋の島の御門にとのいして山ほと、きすきかぬ夜もなし

世を捨て、思ふことなき曉に山ほと、きす鳴て過くなり

こゝた鳴く里にはすめと時鳥初音はいつも嬉しとそきく

我宿をいつ過しけむ郭公有明の月にをちかへりなく
人やとすこゝは庵そほとゝきすこの曉の聲なをしみそ
我袖にかけてをうれし時鳥卯花山のあかつきのつゆ
郭公またぬ隣も聞やせし人のけはひのしのゝめの空
夏の夜の月におくれて出ぬれと山時鳥をちかへる聲
旅にして小夜時鳥さく我をしひて妹かいねかてぬかも
高野山楨の木立のほとゝきす此夕暮もあはれとぞ思ふ
時鳥をしまぬ聲を今ぞ鳴くおのがさつきのさみたれの空
大荒木の杜にやとりて高々といひことなけに鳴く時鳥
植はてし山田の長か門に来てして時鳥なにを鳴くらん
花の枝の青葉立くきこのころは時鳥なく志賀のやまこえ
さみたれは夜中に晴て月に鳴くあはれその鳥あはれ其鳥

高砂のをのへ落くる時鳥さくやひゝきの灘わたるふね
信濃路は野をあまたなり杜鵑菅のあら野を名乗てそなく

夏草

伊吹山させもか草の茂ければ打散る露も雨とふりつゝ
山里は垣ほのひまのあらければ内外もあらず茂る夏草
ひな分けて行くや牡鹿の跡もなく茂りにけりな夏草の原

あやめ

故郷の長柯の沼のあやめ草うへしも長き根をは引てふ
あやめふく例たえねは都邊に花咲うつむ沼もありけり

競馬

駒きそふ神の御庭に立つ人も我かた岡の方をこそひけ

棟花

されはとて陰たのまれぬ隣かなあふち花咲く窓の暗さに

蚊やり火

風もなきかやりの煙なひきあひて暮猶あつき里の中道
玉たれのすけきにもれて香に薫る薄き煙や蚊遣なるらん

五月雨

難波人蘆荷おもけにく舟の着岸もなき五月雨のころ
梅雨にすまの笠屋の蘆簾たれこめてけふも暮ぬとそみる
疎からぬ隣なからも蘆垣のまとはになりぬ五月雨の比

早苗

梅雨を思ひのまゝにせき入て小田のますら男早苗とる也
さみたれは繼てふらぬは近江の海磯回の早苗植糸そ足しつ

夏月

松風のおと羽の山を越えくれば夏ならぬ夜の月澄わたる
夏河に光を見せて飛ぶ魚の音するかたに月はすみけり

夏夜

夏はたゝよるなき里と思ひけり立のいそぎの草の枕に

涼み

入つとふ千船のひまを漕出て夕涼みするなには人かも
水音は絶えし名こそその瀧殿に夕涼しきかせも吹きけり
都をは夜こめに出て朝日山あさ風すゝし宇治の河つら

蘆茂み葉うらにすかる夏虫の隠れてもほのみゆる光は
わた殿の下吹く風の冷かにてせき入れし水に螢とひかふ
この夕引やわすれし螢火の光に見ゆるかとのいたはし

蟬

明ぬれは栲花さく葉隠れにやめはつかるゝひくらしの聲
なくせみのやとりの松の木本にもぬけの衣の風に吹るゝ

照射

夏山のともしのかゝり打しめり雨うちそゝく明ほのゝ空
宵のまの月はかくるゝ雨もよにともし雲やく信樂の峰

扇

夏ならぬ繪書すさへる蝙蝠かばつのそれも涼しき花のくさく

鶺鴒

御舟近く波を焦せる篝火に鶺鴒のとり魚の數も見えけり

西山夏雲

夕ことに峰なす雲はくつをるゝ花にあたこのあらし山風

清水むすふ

旅人のいく度ひてゝむすふらん泉の河のなつのわたり瀬

ゆふたち雨

かき濁し岩こす波もやかてすむ清瀧川の夕たちのあめ
夕立の軒のやとりを始にてうれしき老か友もとめけり
湊入の五手の船は早きかも漕そけてくる沖のゆふたち
風はやみ鞭さすかたに雲落て我駒嘶ふ野路のゆふたち
秋にまた色はならはぬ葛の葉の裏吹かへすゆふ立の風

夕顔

黄昏にはの見し花はしらゝと有明の月の影に残れる

撫子

朝寐髪かき撫子の花の上の露のしはしもめかれすそ見む

藤原の宇萬伎ぬしの手向を、洛陽三條の三寶寺の御墓に、烟に
上て奉れる歌

鳥加なく、あつまの國の、武藏の海、大江の水戸に、高殿を、高知
まして、天の下、まをしあつかり、すめろきの、みことのま、に、
民草を、靡けたまへは、物部の、八十氏人は、夜の守、晝のまもり
と、かしてみて、つかへまつれり、國つちを、たひらの宮の、大城
には、みこともち人、わりすゑて、外のへまもらひ、すめろきの、
日々のみことを、はゆまして、まをしたまへり、中のへは、千々の
軍を、こめおきて、弓取しはり、千早人、たはわさやすと、夜の守、
晝のまもりに、召くはふ、天のかな機、足玉も、手玉もゆらに、神
の織る、しつ屋のうしは、卯の花の、うきともなく、出てこし、道
の空より、頼ひの、神やつきけん、手束弓、杖につきつ、中の重

に、さもらひしさへ、時鳥、來鳴く五月の、さみたれの、はる、日
もなく、未つひに、打こやしぬれ、さね床の、夜をすからに、故郷
の、家をそしのふ、晝はもよ、息つきくらし、みな月の、照日を闇
に、逝水の、過てむなしき、あら玉の、來經ゆく年を、手を折て、
かきかそふれは、十あまり、三とせになりぬ、すへもなく、ねのみ
しなかつ、おきつき所、

反歌

古をけふに迎へて忍ふともいや年さかるあすの日よりは

夏祓

唐崎のみそきは果て、たかりに袂涼しみ漕かへるふね
大ぬさのしからみかけてと、むとも流る、夏の夕祓かな

秋歌

初秋

紀國の室のわさ田の穂むきよりけさ吹わたる西の秋風

晴砌風梧脱

軒ふかき玉の砌の苔の上に夜のまの秋のきりの一葉は

七夕

天河舟さす棹のさはれはや月のかつらの花ちりみたる

あまの川河波高し夜こもりにかへすはすへな明けは面なし

残暑

朝かほの洞まぬほとに降晴て雨より後の秋のあつさは

暮なはとたのめし秋の空見れば風吹とつる西の八重雲

秋蝦

秋されは下のやしろのみたらしに人まをまちて蝦なく也

稻妻

秋立て幾日もあらぬに風をいたむ窓よりもる、宵の稻妻

稻妻の光ならずは暮はて、野中の松をそこと見ましや

秋風

吉野山紀の路に通ふみち行けは笹分る野の秋のゆふ風

村雨のはる、浅茅の露原にぬれてや秋の風は吹くらむ

初秋十七夜三井寺の高きに上りて月を見る

照月の影は浪もて碎けとも光は海をわたるなりけり

あした湖上の樓に遊ぶ

白雲に心をのせてゆくくらから秋の海原思ひわたらん

秋野

君か家の壁草かりに野に出れば花盛なる秋にもあるかな

萩花

朝なさな露たに重き萩か枝の末ふすまてに雨のふれ、は
朝露はまたき下葉に消えのこる野寺の庭の秋萩の花
萩か枝の末はさゝれに流れあひて波も花なる野路の玉川
女郎花を植て孫思邈を思ふ

あまた植て人や妬める女郎花老を養ふ色香とを見よ

花ことに露を結へる女郎花心こまかに見るへかりけり

槿花

一日てふそれも榮を朝露のひるまをまたぬ野邊の良花

ふち袴

花々に色はまけぬる藤袴野はみなからの香に匂ひけり

香にめてぬ人こそなけれ藤袴たれにゆるして花の紐とく

鴨頭草

月草にすらまく衣をめうつしにあやな千種の色に迷へる

紫苑

我ならぬ仇名もよしや醜草のしこちし人もなき世なりせは

荊かや

風わたる野路の荊萱下折て穂に出し秋のかひやなからん

虫

秋の日の峰に入さを待かねて草村ことにすたく虫の音
虫の音の多かる方に露分けて野路の棚橋いくつこえけん
矢田の野の淺茅にすたく松虫の鳴音をとめて我立まよふ
こにこむる友を忍ひて松虫の野にさそふとや諸聲に鳴く

庭草になきにしものを蝨うたて夜さむの牀にちかよる

虫聲非一と云ふことを

つゝりさせ我機おらん秋の野にいとまをなみの虫の聲々

秋夕

思ふことありとはなしに悲しきは秋のならひの夕暮の空

傷岡雄之亡妻歌

夏過て、秋は來ぬらし、吹風の、目にし見えねは、朝影を、涼しと
人の、夕暮は、さひしかりけり、萩の葉の、音はさやきて、蟋蟀せせりの、
なく聲きけは、いにしへの、人のあはれと、いひつきし、時にはな
りぬ、其秋の、あはれちふことを、我のみの、身にしおふかは、妹
なねは、秋たつ空の、すゝろにも、よみちふ國を、何しかも、古さ
とのこと、立ていにし、むなしき牀に、とゞまりて、いかにせよと

か、男しもの、腋はさみたる、はらからの、縁兒と共に、泣子なす、
したひなけかひ、こいまろひ、足摺しつゝ、まとふらん、人こそあ
はれ、あすよりは、いかにせましや、年月を、長くともひて、かた
らひし、ことの悔しき、妹なねは、よみちふ國に、さきたちし、う
なるはなりに、あひ見つゝ、手携はりて、遊ふらん、面影をたに、
見まくほり、枕によれと、いねかてに、夢も結はず、萩の葉に、秋
風さやき、こほろきの、なくよひくの、さね床そあはれ、

霧

みかの原夕こえ來れは泉川いつこ渡りも見えぬ秋きり
朝霧の海の玉藻と見しは此ふもとに茂き杉のむらたち
おほつかな濱名のわたり霧こめて引馬の驛朝立かぬる
河内の國に人をとむらひし時道の空にて讀る

伊駒根の雲は嵐に吹落てふもとの里をこむるあま霧

河内のくさかと云ふ里にやとりてあるほと

我すめと門たゞくへき人もなしこの山寺の秋の夜の月

月歌

山の端にさし出る月の影見れば西を初の秋ならなくに
 我すれる花田の衣のつき草の色なる空に月すみわたる
 千里まで照せる影とゆふ波の汐のたゞへに月さしのほる
 秋の月あふきてのみもあかりかてに筆の林を分けそ煩ふ
 世のうさを昔になして月見れば秋を盛と詠むはかりそ
 かそへ聞く秋てふ秋の聲絶て月影高く夜はふけにつゝ
 ひとへ山隔つ都は秋の夜の月を賑ひ見るものにして

山月

世に出る道は絶えにし山住の月のあはれは秋はかりかは

峯月

ねさむれは比良の高根に月落て残る夜くらし志賀の海面

田家月

いはけなき里のわらへか夕まとい月に指さし門遊ひして

故郷月

ほともななくうつりしゆけは長岡の故郷寒く月はてるらし

秋夜遊墨江歌

にきはやひ、神のみことの、翅なし、漕こし船ゆ、空に見つ、大和
 島根の、青柳の、かつらき山も、生駒峰も、常ある雲は、秋風に、
 いふきはらひて、月讀の、出ましの空は、夕霧の、立も昇らす、住
 の江の、敷津にたては、あからひく、入日のかけに、沖見れば、網

引綱ひく、磯回には、小船釣する、秋の葉の、風のみたれに、岸見
 れは、あら、松原、よる浪に、根毎さらせり、白鷺の、ねくらをほ
 のに、夕闇の、くる、と見しを、月讀の、神の尊の、出ましの、み
 さきをはらふ、秋風も、身にしまねは、汐みつる、清き濱邊に、
 秋の夜の、ふくるをしらに、あそひす我は、

反歌

伊駒峰にいさよふ月を波の上の中空までも見つ、遊はん
 照月にあられ松原ひま見れはかつらの花の地に散りしく

月前述懐

秋風に月すむ夜半の白雲をはらへとかゝる吾心かな
 夜ひく、に月は出ぬかなくさまぬ心の隈を照すはかりに
 井中住せし時

唯ならぬ雲の氣色に門たて、すはされはこそ野分ふく風

詣入幡山放生會歌

秋風は、日にけに吹ぬ、白露は、朝に夕へに、淺茅原、玉と見るま
 て、おきそふと、人のかたれは、うつせみの、世わたるわさの、い
 とまあらは、いきて見せしと、思ふ空、安からなくも、たまさかに、
 立出てけらし、堀江川、舟きほひつ、夕河の、みをさかのほり、
 漕行は、秋はもなかの、十日あまり、四日の夜よしと、月影は、高
 くさし出ぬ、伊駒山、常るる雲は、秋風に、晴れみ曇りみ、岸つた
 ふ、水陰草に、鳴虫の、聲をしきけは、かにかくに、秋そかなしき、
 衣手に、露はそほちて、波の路、遠く來にけり、ぬは玉の、夜さへ
 更ぬれ、月讀の、光のさやに、見さくれは、我心さす、八幡山、神
 さひ立てり、此夜らや、神いさめすと、宮つこら、参りつとひて、

白妙の、袖ふりはへつゝ、須賣神の、出ましの道は、岩かねの、こりしく道を、級たてる、さかしきみ坂、たひらけく、あゆみ行くめり、神遊ひの、三くさの笛は、春鳥の、百千の聲と、打ならず、鼓の音は、あま雲の、よそにとゝろく、神のおとの、をちに聞えて、諸人の、心をすめる、掛まくも、かしこけれとも、いはまくは、たふとかりけり、しらぬ火の、筑紫の蚊田に、あれましゝ、そか跡とめて、里の名を、宇彌とたゝへて、永き世に、あれつきけらく、大神の、おほみ心は、遠しるき、河内の國の、輕島の、あきらの宮に、天の下、治めたまへは、たく袞、しらすの國も、言さやく、百濟も高麗も、草木なす、風に靡きて、年のはに、八十船うけて、貢もの、奉るなへに、もろこしの、賢き道の、ふみともを、よみて聞ゆと、から人も、つかへまつれば、萬世の、今のをつゝに、傳へ來て、大

御代ことの、すめみまの、神なからしも、みはかりに、えらひとらして、國民を、をさめたまへは、そか法に、天のます人、益々も、さかゆく事は、此神の、おほみ心を、いはまくも、かしこかりけり、掛まくも、たふときろかも、しぬのめの、ほからくと、天の原、朝霧こもり、出る日は、此いつきます、すめ神の、遠つみおやと、わかめます、大日靈女の、神なから、天照します、御影そと、あく世もあらず、拜みつるかも、

雁

てる月に雁のまれ人なきわたる我まつ友は此宵來なくにとふ雁のゆくへは霧に埋もれて鳥羽田の千町夕暮にけりたか衣かりかね寒くなくなへに月見し庵も戸さしせる哉

擣衣

里はまたねぬ聲す也から衣うつ山の邊をこえて來つれば
何くれとかたりつゝけて蘆垣の隣へたてす衣うつなり
里はあれて尾花露ちる夕暮に秋をうつらの衣うつおと
人やりの我古衣うつ音を麓の家にく夜さむしも
寝よとつくかねより後に音更て人待かてら衣うつなり

小鷹狩

むさし野の尾花高かや踏しをり小鷹手にすゑ行く人や誰
鹿

月かゝる梢の紅葉散はてゝ牡鹿のたちとあらはなりけり
霜の上におきふしえけきさを鹿の鳴聲毎に我もねさめて
時雨して宿りやはせしさよ中におとろく軒の鹿の一聲
しかりとて合せし夢の野に獨妬きをおのと恨むはかりそ

聲のみやひとり月見る窓の前にをへの鹿の影も落くる

奈良に遊ひし時

もみち葉をとめつゝくれは春日野の男鹿の床に我も宿れり

紅葉

朝戸明て宿りの野邊を見わたせば近き林に紅葉いろつく
大原や里の中道秋ゆけは青葉ましりにもみち散りしく
とめこしをかひなくそ見る山寺の早き戸さしの庭のもみち葉
九重の秋は西より東より紅葉かさして歸るみや人
庭の面に亂て遊ぶ沓おとのありやと見しも散る紅葉かな
荒乳山關路の北のもみち葉に雪か時雨か雲のたちまふ
大荒木の森の下草時雨にも霜にもあはてもみつるやなそ
山里の稻ほす賤か門むしる時雨ぬけふは紅葉ちりしく

遊箕面山歌

五四

神代より、いひ次けらく、天地の、始の時ゆ、持わきて、大山つみの、なしませし、いつこはあれと、雨にさる、みのおの山の、谷間ゆく、清きかふ内は、眞神の、枝に取りかけし、鏡なす、そこひもすめり、此山に、鎮もる神の、にき魂と、見てや過なん、眞木たてる、峰の岩かね、切りとほし、落くる瀧は、天の原、ほろにふみわたす、いか槌の、音にまかへれ、此山を、牛はく神の、あらみ魂かも、

瀧の肩に紅葉一木立てり

うつせとも影はとゝめす落たきつ岩垣紅葉色深きさへ

秋のはて

秋もはや廿日みそかと手を折て山の紅葉を思ふ比かな

久方の天の河原も影きえて秋の夜くらく雁鳴きわたる
豊年の新なめまつる神の前に幣をちらして秋はいぬめり

秋はつる日、信よしの家に、庚申をまつらるゝにいきあひて、

歌よめといふに、讀る、

枕にはよらぬ習ひのこよひしも秋の別をかねて惜まん

かへし

信

美

たか宿も枕によらぬこよひとて行秋さへも止らさりけり

都々良婦見一

五五

つゝらふみ一

冬歌

しとが

世の事は聞えぬ冬の山里にけふもしくれの音つれそする
音たつる時雨もしらていなこきの夜聲賑ふ冬の山さと
管上げて夜の程見れば友船のそなた時雨で波さわくなり
霜にのみ心つくしのきせわたにうたて時雨る、秋菊の花
片岡のもりて日影はさしなから木葉をさそふ夕時雨かな
　　蘆庵しくれのやとりして其あした傘もたせこされしにいひやる
村時雨ふるにとなれる笠の山かさてそ君を止めましもの

落葉

森深き神のやしろの古籠すけきにとまゐるかせの落葉は
散はてゝその木ともなき冬枯に一葉名残の色は見えけり
有馬山落葉に道は埋れぬ君かみゆきの跡たえしより

遊佐保山歌

神無月、時雨の常に、佐保の内は、露霜さむみ、こゝに來て、往し
へもへは、草木すら、しなえうらひぬ、鞆おへる、伴の男廣き、大
伴の、ますら武雄か、家居せし、山路にけふは、袖ぬらすかも、

霜

おきわたす霜の絶間と成にけり今朝は落たる野路の棚橋

氷

夜のほとに降しや雨の庭たつみ落葉を閉てけさは氷れる

信濃路のかしこきみ阪越來れば氷をわたる海もありけり

霰

宮木ひく柚かかりねの板ふきに霰音きくさよの寢さめは

霰

霰ふり夜のふけゆけは有馬山井出湯の室に人のともせぬ

おぐら江の堤を冬ゆく二章

風わたる枯葉に朝の霜消えてあしの穂しろし淀の大澤
何にこの莖葉とゝめし花蓮浪もこそめの色に見えしを

冬月

さゝなみの滋賀の海面月冴えて氷に浪のたつかとも見ゆ
雪ふると見し夜の雲は名残なく晴て更行く月のさやけさ
池の面にとつるとそ見し月影は空にさやけくこぼる曉

更科や姨捨山の風さえて田ことに氷る冬の夜のつき

神無月の比宇治の橋本にやとりしあした

風もなき朝たつ霧のそれをさへ流れて早き宇治の川なみ

冬枯

冬枯て荒のみまさる菅原や伏見も西のみやこなりしを
散はて、寒けに靡く枝ことに芽はりて見ゆる門柳かな
かつまたの池の蓮の枯莖に風ふきわたる朝さむしも
千鳥なくすま山陰の覆つゝら浦つたひしも冬枯にけり

雪

故郷はいかに降つむ今日ならん奈良のあすかの寺の初雪
ひと、せの昔に絶えし山里をけふとはすはと雪踏まよふ
大原の岡のおかみかふらす雪大和國はら道もなきかな

杉かへを雲は走りて吉野なる檜の尾上にはたれ雪ふる
大空を打傾けて降る雪に天のかはらはあせにけんかも
誰か戀のつひの夜かれと成ぬらんけぬか上ふる雪の道芝
丹波路に打越くれは野も山も照日なからにはたれ雪ふる
鯨よる浦山松につもる雪波にけたれて又ふりつもる
呼ひかはず聲を便に夕こゆる山路をしらす雪のふれ、は

雪浅し

いつしかとまたれし雪を旭さす松の竿に見るかわひしさ

雪深し

聞しより思ひしよりも冬深き雪のしたなる越の旅ねは
故郷の難波江いかに寒からん鴨の河原に雪のふれ、は
根芹おふ田井の水溢の色なから氷れる上に雪のつもれる

但馬なる雪のしら濱風さえて猶降つもるゆきのしらはま
冬深み雪ふりつけは三越路の松の木すゑはみちの芝草
積雪のとゝろに崩る山陰は朝戸をおそき里のかとく

感懐

九重に八重降りつめる白雪の下に埋れて老やくちなん
沫雪のあはれは老か思ふ事つむとはすれと下崩れして
狩

大君の御鷹あはすと狩杖の音高しもよ野路のふし原

水鳥

巨椋の入江の小船漕はたちかへれはうかふをし梟の聲
風ならば閩戸にきくを静なる空に嵐のあちのむらとり
池の島松のさえたにゐる鴛の妻呼びかねて波の上におつ

翠池浮鴨

おの、か名の青波たて、冬の池にこゝた浮へる鴨といふ船
千鳥浦つたふ

須磨の山の松ふく風や送るらん生田の浦にちとり鳴く也
大井川冬は嵐の山松のかけ見るふちにちとり鳴くなり

網代

夜舟こく宇治の河波さわぐらし網代にかゝる氷魚の亂は
打かけし波さへ氷るあしる木を守あかすらん宇治の里人
冬の梅

こぬ春にあらぬ物からまつ程を梅は心にまかせてそ咲く
難波江や西ふく冬の浦風にそむけてひらく梅のはつはな
枯蘆にこもれる沼の岸見れば花寒けなる梅のひともと

ひらくやと冬の北窓明見ればふゝめる梅に雪のかゝれる

佛名

聲清く唱ふる御名を頼まれて身は罪なしと思ひこそなれ
御名となふ夜ゐるの法師かあけ衣明て出つとも誰か咎めむ

追儼

年毎にやらへと鬼のまうてくる都は人の住むへかりける

歳暮

谷水の音羽の川も氷ゐてよとめと年はとまらさりけり
老らくは安きとなり年月のくるとあくとの跡につきては

田舎にありし時

世中にさはらて年も暮にけり八重葎さへかれし垣根は
としの暮に、荷田信郷とひ來て、めつらしく、都の春を迎へら

るゝ事よ、客中の歳暮よみて聞せ給へ、翌まうてんとていぬ、
試みらるゝにやと、僻こゝろするに、日暮て、信美の來られし
に、筆とりてよとて、つゝめきし歌、

うつせみの、世は海にかも、我はもよ、棚なし小船、沖邊ゆかは、
風をいたみか、澳つかい、とりかてぬかも、ありそ邊は、波のさわ
けは、邊津槓も、とりえぬかもや、人皆は、しかにはあらしを、我
はもよ、世のしれ人を、難波江の、蘆の八重葎、ひまもなく、物を
そ思ふ、こゝろから、すみかさためす、草枕、たひとあはれと、都
人の、見らくをやさし、水無月の、あつきひるはも、夏蟲の、ほむ
しの衣、一重こそよき、夜はもよ、露にぬれつゝ、秋されは、ひち
こそまされ、天の河、あふきて見れば、月影は、満てそかくる、我
齡、我世もしかそ、長月の、夜寒になれば、雁かねの、おほふ翅に、

もる霜に、はたへ氷れと、冬きぬの、神も守らす、やれくたつ、し
 くれの雨の、ふる衣、身にとりまとひ、ぬる夜まれに、わひつゝそ
 ある、しかはわれと、世は海なれば、大船に、真櫂しゝぬき、わた
 りする、人のうけきも、喜ひも、我はしらすえ、三冬盡、春はちか
 けと、西の市に、立ちも走らす、ひんかしの、市にも出でず、あし
 引の、山邊の家に、庭雀、うすくまりをり、かた鹽を、取つゝしろ
 ひ、さす鍋に、湯わかし酌て、あら玉の、來へゆく年を、むかふと
 やきく、

右寛政五年六月、漂然來京師、茲歲冬十二月廿八日夜賦之、

歲晚夜坐感懷

此年や、何そのとしそ、この夜らや、いかなる夜らそ、あら玉の、
 來へゆく月日、老か身に、たへぬ重荷を、弱車、かけてしのへは、

いにしへは、うけきか中に、喜ひも、有經し事を、白浪の、跡なき
 方に、過し來て、今のうつゝの、よろこひに、うけきかそふは、我
 のみか、豊蘆原の、久方の、天のます人、おのか世の、よけきにあ
 かねは、悲しひを、むかひの岡の、櫻花、咲のをゝりに、ぬは玉の、
 一夜の風に、散りか過なん、其花の、みさかりのこと、やすみしゝ、
 國のはたてに、あふき見て、阿部橋の、とこ宮と、思ひたのみて、
 夜の守、晝のまもりの、をとめらか、赤裳曳はへ、神の如、つかへ
 ませしを、此年は、何そのとしそ、あら玉の、來經ゆく月日、暮は
 てゝ、月もかくれぬ、其月の、入ぬるかこと、開夜なす、黒き御車、
 とゝろかし、よみちふ國に、出ましの、御供の人も、鶴はみの、に
 ふ色衣、にふゝにそ、あゆみやつかると、をろかみの、心もあらぬ
 は、弱車、ひかれも出でず、葎生の、門さしこめて、此夜らを、も

りてそわかす、懸まくも、かしこけれとも、玉きはる、命なにせん、
老か身に、盪を春とも、おもほえす、あはれくと、此夜らを、な
けきてわかす、かしこけれとも、

反歌

立さへしよもつ平坂岩くえてとほらふ道といつか成けん
弱車とほらふ道そたのまる、老のこゆへきよもつ平坂

右

國母御葬送之大路、與寓居相近、因有斯作、

年かへりて、む月のおほやけ事とも、皆と、めさせたまふか、
二月ついたちをはしめに、御ためし、しきく行なはせ給ふと、
もり聞たいまつりて、

年きりと思ひし花も咲にけり匂ひおくれて見ゆる物から

客舎感懐

年といへは、月日あまたに、春霞、秋たつ秋霧、ほととさす、鳴く
や五月の、さみたれの、けふをいく日と、長さけに、いふせくもあ
るか、神無月、しくれの雨の、晴曇り、雪にこもれる、比まてを、
久しとをいへ、其年を、十はた三十、四十ちふ、老の初めも、いつ
のまに、遠さかりぬれ、百足らす、経ぬる齡は、海にある、物とし
聞くを、天雲の、よそにはあらで、おのか身に、積つるやなそ、山
河の、七瀬よとます、此年も、暮果ぬめり、何すとか、世には有け
ん、うつし身と、我思はねは、花の如、榮ゆる人の、今までも、世
にはあらしと、住の江の、濱によるちふ、白玉の、忘れてそある、
宿さへも、とはるをやさしみ、松の戸を、さなしかためて、釘さし
て、入れしとそすまふ、此戸ひらくな、こゝにある子よ、

反歌

浦島か箱ゆたなひく白雲の天にもゆかな老においては

其二

年てへは、明る暮ると、一とせを、一日のことに、いひつゝも、過るを惜しみ、新らしき、春をむかふと、よき人の、家のためしに、清まはり、ゆまはりしつゝ、神にぬき、こと穂咲して、うからやから、にきひゆきかひ、たぬしきを、へめとそいはふ、内日さす、宮のとのへの、水鳥の、鴨の堤に、草枕、かりほにはあれと、六年まで、おき居ふしなれ、世の人の、なすわさしらす、鹿しもの、ひとりある子も、打たのむ、せなに別れて、ぬは玉の、衣着まとい、ひたふるに、後の世たのむ、すへのすへなさ、

反歌

生死の二つの海の中つ瀬にかゝりてあまた年も経にけり

雑歌

天

八百萬千よろつ神の神ことも天まつなりて後とこそきけ

日

久方の日のたてぬきに春秋をあやに織なすたく機之神

星

闇たにも忍ふさはりと亮けきは天のかゝせ男あしき神なり

雲

晴曇る人の心にくらふれは雲の迷ひはかことなりけり

曉雲

よしの山雲にまかへる花さけは花にもまかふ曉のくも

雲有歸山情

まかはしと花にわかれて小初瀬に夕はかへる春の浮雲

青霞

浅みとり我まつ染て春の色を野山に見する朝かすみかな

煙霧

夕暮の霧の籬の島松は煙にたてる眞しはともみゆ

雨

三芳野の山に入にし人とへは花にも雨はさはらさりけり

露

白露に消はおくれぬわた物の命を人はたのむなりけり

風

卷向の檜原さやきて吹風に初瀬をとめの袖かへる見ゆ
思ひつゝけふも暮ぬる都邊に山風さえて出かてにする

山

ふたら山吾妻の空と聞つるを茂き御陰はこゝにし有けり
阿耨多羅我たつ袖を始にて比枝の山彦よはぬ日もなし
萬世の國の鎮めのふしのねをあふけは空にうつしみの神
田子の浦や千尋の底に走出のふしは仰きて高きのみかは
高ねこそ時をもしらね春されは青柴山に霞たな引く
消てふる雪かちりけひみな月のふしのすそ野の夕立の雨
庵原の清見か崎に朝晴て不二は秋こそ見るへかりけれ
箱根路の雪踏分て眞しらねのふしの高峯を空に見るかな

谷

誰か来て住つきにけん山深き谷のひとつ屋煙たつ見ゆ
原

下野や那須の篠原しのふとも都は遠しあゆめわか駒
野

むら雨の名残は草に埋もれて野末の小川音まざるなり
海

越の海は浪たかゝらし百船の渡りかしこき冬は來にけり
伊豆の海を漕つゝくれは浪高み沖の小島よ見え隠れする
綿津海のそことも知らぬ泊して袖には波の懸ぬ夜もなし

海上眺望

唐を出て幾日の波の上に不二の高ねは見ゆとこそきけ
河

津國にありといふなる玉川は卵花くたす流なりけり

瀧

岩根よち蔓かづらにかゝり越くれは落瀧つせの水かみにして
散花は春の水沫に消はてゝとはに流るゝ三芳野の瀧

池

かふ内なる狭山の池の廣ければ稻葉蒨つむ舟も見えけり
道ゆかはとひても見ませ笠縫の眞菅刈るてふまのゝ古池

皇都

神なからえらひ定めて國土をたひらの都今さかりなり
九重うらふちの内外うちとに遊ぶ鶯の春はくるれとふるす忘れて

神社

神まつる黒木の殿のかり初を松の一木に造りけるかな

里近き野中にたてる神社木深からねと茂りあひにけり
寺院

小初瀬の寺の長屋のかり枕夜ころになしむ鐘の音かな
墨染のくらまの寺と聞つるは雪にあかるき山路なりけり
今はもよ片われ月の九重に東の寺のにしにたつみゆ
曉は嬉しとを聞く鐘の音を夕の寺にあはれすゝめる

門

門廣き人の情を見聞くには交りかたきものにさりける

隣

頼めこし壁の隣のもすれはあふさきるさにうたて世の中

宿

朝とくと思ひし宿を鶯の鳴音ほたしに出かてにする

田廬

引はへし山田のひたの繩朽て守りにしまゝの岸のふせ庵

窓

餘所はまた暮もはてぬを森陰にふみ見る人の窓の燈火
法の師のおこなふ窓の紙やれて頼める西の風は寒しも

竹窓夜雨

ねさめては文見る窓に植竹の葉をうつさ夜のむら雨の音

軒

軒並ふ都のにしの錦織おとたかしもよ静かなる世に

關

逢坂のゆるさぬ關にたゝすみて時雨をよそに過しつる哉

僧

木葉うくわか井は雪に埋れて佛のつかへ今朝そ怠る

翁

百年をかそへもしらぬ古翁此ひとさとの神とかしつく

若子

弓箭おひ君か御幸のみさきおふわく子美しくし我聲にせん

樵父

大木曾や小岐曾の山の深ければ真木の杣人こゝた入るてふ

漁父

ちぬの海の浪まにうかふ櫻鯛網引や花をちらすなるらん

懸想

山川の岸に根はへる藤かつら思ひかけては橋とならめや

疎くなる

玉たれの小籠にかゝれる葵草かれく秋に逢んとやする

夜ひとりをり

君は今越はてぬらん立田山なかむる峰に月は入にき

名をかる

たつ名をは外におふせてかつ歎くそれを便に人や戀よる

堪しのふ

あまりにも老ぬる人の心かなとはねと恨む節も見えぬは

三年たゆる

三とせこぬ便をきけは東路の草の枕に妻もとむてふ

月へたつ

今こんといひしも久し我ならて親を思はゝ早かへりこね

一夜へたつ

隔つるは一夜はかりのさね床に心つからや塵のつもれる

不逢

たらちねのゆるせし我を人言の千名の五百名に逢はぬ此頃

片戀

中々に思はすもあらぬ風の音の聞えて苦しかた戀にして

弓による戀

引ならずとのいか弓弦音更て誰か上ならんうしと告くなり

機による

千々わくる絲の亂や高機の空なる人もこゝろわひては

絲に寄

神ことの祟にかけてくる絲のたえは次んよ戀ひな亂れそ

荻に

亂わふ荻の葉風のさや／＼に人そいふなる夜には隠れよ

女郎花に

掘植てかひある花は女郎花くねるも我をたのむ也けり

秋もはや末野の原のをみなへし人に折られむ時も過けり

ないかしろ

さりともとたのむ心も我からに芥河にそ身を流しつる

怠り

おこたりは我と恨みん綱引てあふ夜あはぬよ心見しから

夢

思はぬも思ふも夢の枕とふおもふに見えて早もさめなん

竹與心俱空

ためすとも直き心は自ら竹とゝもにやむなしかるへき

野渡無人舟自横

冬枯の野川の風を身にしめてあはれや獨わたり呼ぶ聲

世人結交用黄金

交りをこかねに結ぶ世の人のつひの心そ常なかりける

白眼看他世上人

世の中の人を探れば自ら塵なき庭のまつの下ふし

悔教夫婿覓封侯

何にかく出し立けん劔太刀名の惜けくも今はあらなくに

調與時人背、心將靜者論

我をしる人しなれば我しらぬ人に見すへき言草もなし

元興寺の僧にならへる

鷹すゑて分る野山に引犬のさときは人にうとまれそする

畫題 初夏晚來微雨

澄月

よしやふれこの夕暮は時鳥旅たちぬへき雨もよのそら

蘆庵

緑そふ小雨やくらさ木隠れにはの見え初る窓のともし火

蒿蹊

舟とむる江の波くれて打そく雨にまたれつ山時鳥

立齋

橋見ゆる野川の岸の夏木立暮ゆく色も雨をふみみて

夕つけて水に音なく降雨は卯花くたす初めなりけり

海島暮天舟泊圖

名もしらぬ沖の小島の磯枕夕浪さわきあきの風ふく

溪舟圖 天地一釣竿の心を

海原にたゝ一筋の釣の絲の外にうつさしおのかこゝろを

月下草露のかた

更ゆかは霜やむすはん白露の光を寒み月すみわたる

山田に喬松立ち

植はてし山田の岸のひとつ松影いとはるゝ時は來にけり

小松に雪かゝりたる

さかの山弟ねのけふも風さえて小松かうれに積る白雪

手毬胡鬼の子

鶯の軒端の聲をはしめにて百千とりく遊ふ春の日

河柳三日月

涼みとる淀の里人河そひの柳に落るつきを見るかな

鶴鴿石上に遊ぶ

いその上におりゐるほともいとまなき教に遊ぶ庭叩かな

池水氷り千鳥群とふ

冬の池のさゝ波とつる曉に氷らぬ聲をなくちとりかな

紅葉散り鹿の足跡あり

此秋も行てかへらぬ跡見れば我さへもねに鳴ぬへらなり

蒿 蹊

もみち葉は猶散しけやさを鹿の跡を獵男の目に立てぬ迄

暮てゆく秋を男鹿の跡とめて深山に我もかへろとそなく

屏風に殿つくりの上を時鳥鳴て過く

との守のとのい人かも瀧口に名乗て過るさよほとゝきす

たかき山に雪つもり月空にすむ

しら山をおろす雪吹の風の上に冬の夜中の月すみわたる

楠公讃三章

君か思ふ君にありせは劔太刀ときし心のかひそあらし
君こそは君をしらされ天地の神し知れらは知すともよし
ほまれある名をはあふきて大方は君か心を知らぬ也けり

浦島子

古郷と思ひしものを年経ては知らぬ國にも我は來にけり

東方朔偷桃

すましきは盜なりけり幾千歳後の世までもかたり傳へて

六歌仙

言の葉も人のほまれも自ら六つてふ數にあふや何なり

陶淵明

秋菊の露のおきふし安き身をなと世に出て立やまといひし

能因窓よりかしらさし出したる

いつはりを我心からゆるされて迷ふか道のはて知らぬ空

蓮性倒騎

西をさす心のかたはたかへとも背かてのりの道歩む駒

西行猫の火爐手にすゑたる

杖笠の外には何をから猫の火とりの灰のかゝる身にして

雪中常磐子

降雪に羽くゝみかぬる夜の鶴悲しき聲も天に聞えん

小原女の柴に腰うたけ煙くゆらせたる

休らひてあたにくゆらす烟草それも眞柴の空になひきて

旅人雨を凌ぎつゝつれたつ

三吉野の花に心のいそがれて雨やめてともいはて行らむ

庵山雨

白雲の上のいほりと思ひしを夜をすからの雨の音かな

緑毛龜

こきとても緑の衣の位山おふてふ龜の名こそをしけれ

鶴むれとふ

鳴渡る天の鶴むら聲なくは空めの秋のかせのしらくも

松に月かゝれり

月すみて松に聲なき秋の夜は緒すけぬ琴の遊ひなりけり

比枝に雪つもれり

眞白根の日枝のみ雪の曉はふし見ぬ老の思ひ出にして

老梅

なへてとふ人もあらしな古郷の老木の梅の春の初はな

立雛

別れすむ教へ習はぬいにしへの河洲の鳥に遊ぶさま見よ

明鳥

夜からすとたのめし聲をいきたなき枕に明る東雲の空

其かたと云ふに

朝妻に泊する舟寒からしたえす伊吹の山おろしの風

早友迫門の圖

うみ芋なす、長門の國と、豊國の、中のわたりは、はや友の、神の
まもれば、百舟の、小戸の汐あひ、潮まちて、眞かちしゝぬき、風
待て、漕きこそわたれ、此神の、相うつなへは、鯨うく、大海原の、

西をさし、北へ廻らせ、よくゆきて、好くもそ歸る、此浦の、磯回
に立て、人さには、住ぬる里を、たにの浦と、名には聞えて、かし
こしや、海をたのめて、背ともなる、山に畑うち、鹽木こり、寒さ
よひく、波の上に、千鳥妻よふ、蟹の子の、いつちとまりと、漕
こねは、妻待かぬる、枕邊に、波の音さわき、あとへには、山風さ
えて、いく夜あかすも、

反歌

海の底のにきめかる夜は荒鹽の干るも満るも神のまに〜

見神崎遊女宮木古墳作歌

うつせみの、世わたるわさは、はかなくも、いそしかりけり、立走
り、高きいやしき、おのかとち、はかれるものを、ちゝの實の、父
や捨けん、はゝそはの、母か手はなれ、世のわさは、多かるものを、

何しかも、心ゆもあらず、たをやめの、操くたけて、しなか鳥、猪
奈の湊に、よる船の、かち枕して、浪のむた、かよりかくより、玉
藻なす、靡きてぬれは、うれたくも、悲しくもあるか、かくてのみ、
有はつへくは、いける身の、生りともなしと、朝よひに、うらひさ
ふしみ、年月を、息次くらし、玉きはる、命もつらく、おもほえて、
此神崎の、河隈に、夕汐待て、よる波を、枕となせり、黒髪は、玉
藻となひき、むなしくも、過にし妹か、おきつきを、をさめてよ、
に、かたり次き、いひつきけらく、此野邊の、浅茅にましり、露ふ
かき、しるしの石は、たか手向そも、

右遊女入水之事見圓光大師傳記

賀荷田信美之新室歌

掛まくも、かしてけれとも、いはまくも、あやにたふとき、すめみ

まの、神の尊の、御心を、たひらの宮と、定めまし、御代の嗣々、
 老松の、千歳なせれば、枝葉おひ、根はひ廣こり、天雲の、上につ
 とへる、臣達の、末にまゐ出て、夜の守、晝のつかへに、雲に乗る、
 龍の尾をふみ、鵲の、橋をわたりて、かしこしと、身もたな知らず、
 汐干の、か田の氏人、いさをあれは、此大宮の、とのへなる、鴨の
 河岸、つきならし、岩根とりなめ、真木柱、えつり壁草、はこひも
 て、造れる家は、さき草の、さきてまさきく、うみの子の、末のす
 ゑまで、住次ん、始おこせは、大鳥の、羽かへはせしな、河のへの、
 いつ藻の花の、いつも榮えむ、

反歌

つい立る君か新室諸人のほく豊御酒に歌たのしせな

送佐々木真足東行歌

あつま路は、はるけかりけり、わたつみの、へた行道を、海わたり、
 河舟よはひ、ぬてゆらく、馬に鞭さし、真木立る、山をもこえて、
 ゆく人も、登りやはえん、雲たにも、いゆきは、かる、不二の峰を、
 何にたとへん、打よする、駿河の國と、なまよみの、甲斐にうしは
 き、伊豆相摸、國のことく、立きそふ、高峰ことく、八尺瓊の、
 五百つ、とひを、緒に貫て、きすめる玉の、あな玉は、ふたつやは
 ある、天にます、玉のおやちふ、神わさに、造りみかきて、立出の、
 峰にとこしく、つむ雪の、光か、よふ、走出の、麓の海の、田子の
 浦に、ゆふ花さけり、みすまるの、玉拾はすは、浪の穂の、ゆふ花
 つみて、濱つとに、もてこ我せこ、歸りこん日は、見ぬ老か爲、

小澤蘆庵をはしめてとひゆきし時、翁箏の琴、橋の經亮やま
 琴かさわはせ、あるしせられしに、よめる

山里の二木の松の聲わひて秋のしらへは聞くへかりけり
翁

山陰のふた木の松の秋の聲人に聞かるゝ時もまぢけり
二木の松とは、此庵の庭もせに、年深きか立るをもて、いひよ
するなりき、翁世を去られし時にも

玉琴の緒はたちしかは君か庵のふた木の松よたゝ秋の聲
南禪寺の庵にありし時
翁

君かすむ宿の水音聞つれば濁る心もあらはれにけり
かへし

我庭のさゝれ石こす谷水のすむとはかりは人目なりけり
年の暮には、いつも炭を切て贈らるゝに、よみてかへせし歌
埋火のすみつきかたき都にも思ひをおこす友はありけり

かへし

翁

思ひやるかひこそなけれ埋火の炭つきて唯久にわれこそ
河内の國にとひゆく人のありて、はろくゝ來りき、こそ秋、
なき人をこゝに伴なひこし事を思ひ出て、すゝろに打泣れつゝ
身は同し家にありとも物思ふ心をいつち宿りかへてん
とし月うとかりし人のもとより、度々おとつれすれと、聞えぬ
はいかにそや、うらみつへきものそといひおこせしに
なかゝに我怠りをしるへにてうれしき人の心をそ見し
といひしかは、心とけぬとなん、又の便にいひこせしなり
すみかさためす、をちこちしあるくを、今はいつこにと、人の
とひければ

風の上に立まふ雲の行方なくあすのありかは翌そ定めん

とこたへしかは、爪はしきして、憎きものにいふとなん聞えし
又長柄の濱松陰に、かりほつくりてすむとて

結ふより荒れのみまざる草の庵を鶉の床となしや果てなん
庵を鶉居と名付しは、聖人鶉居穀食の謂にわらず、鶉は常居無
しと云ふによれるなり、此いほりに、ある夜ぬす人入て、いさ
さかある物をつきもていにけり、あしたおもふ

我よりも貧き人の世にもあれは茨からたちひまゝゝる也

其入りし壁のこほれを、窓に作らせて、盗窓と名つけて、風を
入る便りよしと人にかたりしかは、あなしれくしとて、あし
く云ふとも聞し

岡男鳥と云ひしは、友垣の中に、物ら問かはしつゝ、いとうれ
しきかたらひ人なりしに、病して、俄に失せしかは、打泣きつゝ、

我こそと思定めて捨し世の人におくれんものと知らすて

まさのりと云ひしも、まめかたりする友なりしが、打つゝきて
はやう死にけり、えかたき人々をさいたてゝ後は、友とてもと
めすなりぬ

脱かへん一重衣もあらたゝ露置そふる秋にさりける

或人、世に有わひて、云ひこせる

ゆく末の遠きをさても忘られて身の一つたに今は給はせ
と聞えしに、よね一斗をおくりて

行末もあすの便もしらぬ身の晝間はかりは過せとぞ思ふ

、岩井何かしといふ謠曲の上手の、七十の賀をもとめ來たられし
かは、よみてあたふ

鶯のねくらの竹のふしはかせ世の長人といはふへらなり

しるしらぬ人の、齡つめりとして、いはひの歌こふ毎に、いつも
贈れるうた

かきりなく齡たもちて春秋を千々萬代と數へても見よ
あるやんことなき御かたに、時々參りて、物ら聞えたいまつる
なへに、わつかに散りと、まりしふみともを、めなし鳥のやく
なき物から、取あつめ奉るとて、よみてくはへし歌
今はたゝ老波よするくつれ岸ふみとめよとも頼む君かな

御かへし、ろくにそへてたまひつれと、かしこければしるさす

四天寺回録 三章 雲水とは五層の浮圖の名なり

雲水もやけか亡ふとまたき世を記せし文に在りやわらすや
名そ誠われにしをか冬枯の昔にかへる風のおとかな
始ありし昔の時を人は見し今の終にあふか悲しき

船

から櫂を五手にたて、四つの船わたりし三代の例忍はゆ
空かすむ難波の海の朝なきに帆手打つれて出る舟人

車

東にたつ市見れば小車のはこふ秋物ところせきまで

馬

中々に翅は折れん一日にも千里行くてふ甲斐のくる馬

牛

五月雨の晴間もとめて鋤返へす水田の歩みうしところそみれ

犬

夜ひく／＼に垣もる犬におとされて憎くも妹を思ひこそなれ
戸さしせぬ野寺の門に伏なれて稀にそ犬の何をとかひる

猫

たか家を離れてこゝに迷ひこしと、む一夜になる、から猫

猪

ふみ迷ふふしの裾廻の真かや原荒猪の通ふ道は見えけり

鯛

安濃の浦の鯛つる蟹かけふもまた釣誘ては酒にかふらむ

鯉

淵ふかくすむとはすれと淀舟の棹にそ鯉の驚きをして

鱸

出雲なる松江の鱸秋風に姿を見せて立てるしらなみ

鯨

松浦かたかよふ鯨の跡見れば天路にけふる八重の汐風

260887

蟹

蘆原のことは茂くてかひなけに世にすむ我と人も見るかに
津の國のなにはにつけてうとまる、蘆原蟹の横走る身は

蛛

世中はかくこそ有けれ軒わたる蛛の巢かきに秋の風吹く
軒こほれ瓦碎けて古寺の蛛の網にも月のかゝれる

鷺

かゝ鳴てゆふへはかへる荒鷺の翅にしのかく筑波やま風

鳩

野分ふく風にはねきり飛ふ鳩の宿りまへと友は離れす

雀

二ひらの竹の臺のねくら鳥とのい呼起すゆきの朝聲

色をわかちて、人々とよみける中に

花に咲き絹に染つく紅のうつろふ色を見はてすもかな

常に茶を煎てあそひ敵とするによめる

あかてしも春の木芽を摘て煎て心は秋の水とこそすめ

東坡云、佳茗似佳人

すむといひ清しといふもよき人の常とし聞はあかぬ我友

茶如接高貴之人、失度其悔不可歸

天しるや真名井の水のえらひなき悔の千度はしれ人の友

法にいり法を出すはあちきなくすむも濁て終の世や經ん

空也堂の法師、茶筌の歌乞ひしに

草木にもあらぬを竹の穂になひき末は緑の波も立けり

茶盒子を作りて、其土色もて、冬衣と名つけたるに

この歌四
句本の
まゝ感案
袖こそも
られの誤
し寫なるへ

こく薄くかさねても猶冬さぬの神まもらね寒けなりけり

香煙一嘘遣悶といふ事をよめと云ふに

愛き事を空の烟にふきやれは垣根の夏の草やなになり

河内の尼、足袋ぬひておくりしに

淺沓のあさましきまで老ぬれば此たひを世の限とぞ思ふ

かへし

唯心尼

あさくつの淺くは君を頼まねはなと此たひや限なるへき

伴蒿蹊の女の、とみの病にむなしきと聞て

齡とて人のいはふは愛きことの數そふ年の積るなりけり

翁の齡、我には一とせを越えさせしかは、いとほしさにいひや

りけるなり、むかし今をおもひめぐらすに、唐の郭汾陽、此國

にては、皇后宮大夫とし成卿をおきて、終の世まで、うき事し

らす、富と齡と、ためしなくきこえたるは、あらすなん侍りき

冬の夜のなかきをかこつ老をあはれみて、かたはらにある人の、
 何くれとなくさめかねつるあまりに、光源氏の物語を、つふつ
 ふとよみて聞ゆ、一夜に一まき或は二巻、長きはふた夜三よに
 も、巻々の終ること、是かあたひに、歌よむへく云ふ、いな
 まてよみつるか、そのこゝろをやたかへつらんもしらす、いみ
 しきをこわさなりけらし

桐壺

宵のまにはかなの月は入にけり妬める雲を懸しなからに

帯木

さまゝに定め争ふ人の上にはては心もさみたる、空

空蟬

やり水のほまれの門をひき入る、車は戀の重荷なりけり

夕顔

けやすしと思は、なとてよりて見ん明るを待ぬ夕顔の露

若紫

九重の北山さくらさきにけりかけし霞もなこりなきそら

末摘花

中川にとよき橋を渡されて見るめなき野を分けもこし哉

紅葉賀

もみち葉の光をけふは照そへて千秋と君をいはふへら也

花宴

かすむ夜もしつえやすけに手折らる、薄花櫻色に匂ひて

葵

わりなしや妬さ一つの浮瀬には人をも身をも沈めつる哉

さか木

神風の伊勢は其方と差櫛のさしてのらねは戀のしけ、ん

花散里

色は香にまけてにはへる橘の花散る宿もたえすとはまし

須磨

心から身は山かつにやつせとも猶こりすまのうら嘆して

明石

都にもひ、きの灘の汐あひにかつく白玉誰にさ、けむ

落漂

忘らる、身はかつしれと墨江の濱に寄こしかひは有けり

蓬生

藤浪の懸てまつとはとひてしる露ふる宮の門のしるしに

關屋

心にはゆるせし關にあふ坂の山した平袖ぬらしけり

繪合

須磨の浦にすみは果しと繪に寫しとに啣てけふを待けり

松風

うつり來て我宿なから明石瀉なれし岡邊の松のあらしか

薄雲

さりし世をむなしき空にかへり見る心の鬼よ我を誘なふ

朝顔

あさかほの花田は色を深むれとうつらておける庭の白露

をとめ

少女らかつれまふ衣の音さえて夜や更ぬらん庭火濕れる
玉かつら

筑紫路をいかなれとか立出て都にも世をうみや渡らん
初音

雪わけてけさ谷いてし鶯の春の方には聲もこほらす
胡蝶

春の日をくるゝにあかて飛蝶の行へは花のちりの紛ひに
螢

見ゆをいとひ見えぬを恨む夏虫の光は人の爲ならなくに
常夏

稀に遊ぶ庭のまうけの水うまやとこなつかしき花の夕映
かゝり火

まとはせし箱のふたみのあひ難み蔽ふははかな何の亂そ

野分

玉垂の小籠の見いれに心さへすさひにけりな野分てふ風

行幸

小鹽山みゆきのためし野にみちて打ちる雪に御鷹よふ聲

藤袴

たき合すけふの競は秋ふかき野にぬき捨し衣にや有らし

眞木柱

葎おふ壁のこほれの蝸牛這ひかゝりては行方もなし

梅か枝

鶯の巢立の鳥は久かたの雲井にいまや名のる一聲

藤末葉

大島のなるとならずと沙舟のからきわたりも風を待えて

若菜上

猶わかきけこそ添ぬれ春の野につむ菜を君か老の始めに

同下

陸奥にいつか來にけんたならしの琴は緒絶の橋と成にき

柏木

背きても世に在ふへき心にはまけてはかなき人の悲しさ

横笛

取つたふ世々のかたみの笛の音の残て寒き秋にさりける

鈴虫

それにとて告し心を笛竹のふしたかへりと嘆きてそよる

夕霧

迷ひ入る心の奥も霧こめてしのゝみたれの小野の山ふみ

御法

花やきしつかさのきぬと見し色は野邊の煙の雲の紫

幻

春さむみ淡たつ雲にかくろひて光はいつら峯のしら雪

匂宮

昔にはぬしこそかはれ梅櫻にはひおくれぬ春は來にけり

紅梅

折てやる花に心をそへつればこそは幾春見ませとそ思ふ

竹河

みたれ碁の右まけたりと聞からに愛し櫻は散ぬともよし

橋姫

都にも色をあらそふ秋なから人香なつかし宇治の山里

椎か本

あはれ君世をうち山の奥深くほたしの網はたちて入けん

總角

情ある人もつらしな蓮葉の上に心をのせし身なれば

早蕨

法の師の是を薪にかへて摘む野のつくくし山の早蕨

寄生

見まさりにかく咲花を根分してぬすまほしき園の白菊

四阿

打つけに其人かたを垣間見のあな怪しとも思ひこそなれ

浮舟

河島にいさよふ波のいかにしてふたゆく心せきや止めん

蜻蛉

それとたに思へとすへな宇治川の玉藻に靡く妹かくる髪

手習

己か上をよそに聞ては且つ嘆くたかゆるさねは死なぬ命を

夢浮橋

有てなき世の常をしも渡らへはなきか有りてふ夢の浮橋

つゝらふみ三

秋山記

あきの山見にははあらで、此三とせがほど、足ひきのやまひにか
かづろひて、世のわたらひも何もはかしくしからぬ、かゝるを、昔
は、但馬の城の崎のゐで湯にするし見しかば、こたびもまたおぼし
たてるを、しりに立てくる人も、としごろふかうそみしことわれは、
ともにとて、はゝそばのおほせのまゝにめしつるゝなりけり、長月
の十日あまり二日といふ日かど出す、したしき友垣の女の許より、
あすなるときこえ給ふにぞ、ゆくりなくもおもふたまふる、玉銚の
道もたえくにとか、おぼつかなさゝへそひて、胸つぶるゝぞわり

なき、朝なゆふな馴れにし君が出てゆかば、何わざをして月日過さん、秋風もいたう身にしむころにしも侍れば、いとよういたはりて、御ともなくかしこにいたり給ひね、此あつごえたるもの、いとあらしくしげなれど、山里の朝よひしのがせたまはんにはとてなんと、聞えこしに、情ある人のころをつくし綿、身にそへゆかばさむけくもあらじ、うべしも天の羽衣と奉りぬるは、ころさすところなん、山陰の國にて、いといたう寒き所なりける、須磨の海づらいかになかむらん、明石のとまりはさぞなと、誰々もうらやみ聞ゆるにぞ、まづかのわたり歴つ、ゆかばやとて、西をさす、草のまくらのをかしきは、芦屋川の松陰にしばしおりゐて、土くぼかなるに、小石をつみて、木葉松笠打くへつ、茶を煎てあそぶ、鶴煙を避くるといふ句のころしたり、かしこくも小がめ一つはもた

せたりけり、蘆の屋の蚤のたく火のそれかとして、道ゆき人も過がてに見む、日高けれど、住吉の里にやどりぬ、すまの浦傳ひする今日は、海の面なごやかに、百船のゆきかひ、かりごものうち亂れつ、渚には釣ほこりて遊ぶを見れば、この磯山松の色も、人々のまなこもひとつみどりなる、さえある人も口とづるわたりを、まいて打出べうもあらず、此つれたる人の、いにしへ光源氏の君の、罪なくてさすらへたまひしといふ跡はいづこぞ、巳の日の高沙とは、この海の荒たるにこそ、けふのにはよきには、さることいかでかとおほゆるを、かゝるところにも、年月ねんじ過させけんよなど、打うめきかなしがる、いと聞にくしとにや、齡のほど五そぢにたらぬ法師の、おなし松陰にあるが、にらまへるやうのつらつきして、この都人よ、さるあだしごとを、まさなげにうちものがたりたまひそ、

彼の式部とかは、あとなしごとゆゑしく作り出たるむくひに、おそろしき所につながれ、永劫の苦しみをうけたるぞかし、もろこしにても、かうやうのことかけるものゝ報ひなんいと罪深しかし、羅氏が三代まで唾子をうみしなども云ふ、かまへてく信ずまじき文ぞと聞ゆ、おもひかけず、めざましうこそ有けれ、法師もおなじ道ゆく人なれば、行くく物がたりしつゝなぐさむ、いとかたじけなきとおほかりけり、只今の御さとしこそ、世に珍らしくも承り侍れ、さればかの物かたりは、佛の教のたふときにも、むねおのつからかよひ、うつゝの世にも、かしこきいましめと成ぬるよし、昔の人々のろうじおきてつるを、いかさまにおぼしわきて、かうまでくたし給ふらむ、そのことわり、かたはしばかりも承らばやと云ふ、さればよ、道々の文のことわりとく人は、あながちにも其旨深から

んとては、とぞまかうさまにもてつけていひしらふほどに、はてはては、もつとつゝろにもあらぬ私言をさへとりはやす也、此物かたりのことわり云ふなん、わきてをこなる、しかのみならず、式部は石山の佛のへん化なりと、いとくるはしきまでほめなせるを聞けば、おのがかしてむみちのあなひにもやと、あたら眼をついえたるが、今はとりかへさまほしき年月なりけり、さるをかゝるまめごと、いかでをみなわざならん、父の爲時か筆くはへしと云ふは、しひてあが佛とあがむる人の、ぬしなき眼なりき、そもつばらにかへし見ば、我ことまたずも、おのづからさとりぬへきものぞ、其一つふたつをかたらん、先光君の人がらいかにぞや、かたちのめでたきはいふもさら也、才のほどもいにしへに競ふへきはかたくぞある、ほんじやうのまめだちたる、交野の少將には笑はれ玉はんよと云ふ、よく見

れは、あらずなん、ひたふるに情ふかく、したしきにも、うときにも、萬にゆきたらひておほゆれと、したには執ねく、ねぢけたるさがなんおはす、薄ぐもの御ことは、人皆罪ふかしたこそ見れ、空蟬の裳ぬけのきぬも、猶わかきほど、ゆるすへきを、前さい宮、玉かつらの、うたてもてわづらひ給ふは、親さまあしきわる人なるを、世の中まつりごちては、文王の子、武王の弟とずんじたる、いと聞にくし、右衛門の督のから猫のかよひ路は、心とまらぬあたりには、いかゝ岩ねの松よこたへん、ゆるしなき眼に、人のこゝろをやましめ、野分のあしたのかいまみは、親子の中らひにだに、しうねきこゝろづかひも何事そや、それがあまりのわれたる戯ごとも、此君の情しきは、世の人には過けんかし、さるを、須磨のさすらへ、おのれ罪なしとおぼしたるは、教なき山賤の心とやいはん、又桐壺

の帝の、此世ばかりはさてもあらめ、神さりましても、猶愛慾のまなこ明らかならず、汝は罪なき身を、いかでかゝるありそに朽んとやすると、都にあまがけりては、朱雀のみかどの曇りなきを、いかりにらみて、御光をなやませ給ふは、さしもさとりなき御神にぞましませる、朧月夜のしひたるさゝめ言、王命婦をせめありくなどは、いかめしき國つつみならずや、夜居の僧が饒舌、老やぼけたる、光にや媚たる、大學の君ぞ、いみじき有職にて、まめ人の名をほむるかと思れは、小野の夕霧分迷ふは、友垣のまことなし、見よゝゝ、筆のすさびのさかしきまゝに、此源氏の君ぞ、ひとの國なる聖達にも、をさゝくおとらじのまけじ心もていひなしたる、戀の山にはくしたをれ、口かしこきがうたてけれ、かうやらの筆つきなん、をみなめ、しきほん性にてこそあれ、されと言のあやに妙なる、心ばへ

の巧なる、このたぐひのものには、やまともろこしにもならびなきを、もし強てこれが徳見んとならば、雨夜のものがたりに、大かたの人の心のくま、名残なくあなぐり出たれば、かへりて讀見ん人の、しづ心の穢なきをいましむる教ともなるへき、おほよそよろづのことも、私ごともてことわりなさむには、あやしうひがめる心も、直くまめしく取なすべかめり、さるわざのうたてさよ、我佛の道も、あやしうめつらかに説なすはかたはなり、此物語も、其世のさまのまばゆきかきりを、さらしくうつし出たれと、其遠からぬ世にみだれたるを見れば、まめ人のいかで推戴くへき、今のおほん時ばかりかたじけなきは、往しへよりも稀なれば、君をあふぎ奉るあまりには、己がどち喜ひするいとまには、讀て遊ふへけれど、さばかり心いりてよむとも、何のやくなきいたづら文なり、かまへて

かまへてまどふへからすと、いとすぐしく聞えたり、心さすかたのたがへるには、行手にわかれぬ、猶しりへに立てゆかまほしく、ことゝひまなふへき法師なりけり、からす崎とか云ふわたりの、清き渚におり居て、時過るまであさりをり、日も山のはならんはと云ふに、暮るゝともいとはんものか燈火の、明石の浦にむかふ旅寢は、大藏谷と云ふ所にやとる、こよひなん世こぞりて月見る夜なる、所がらたゞにやあらんとて、濱邊に出たれば、月花やかにさし出て、風波いさゝかもたゞず、さすがに海面は、青にびの衣着たるには、かのはひわたるほどゝいへど、こしかたは、夜ぎり立ちめて見えす、あはと見なからも淡路のしまはたゞさしむかひて、かち路やあると思ふばかり也、濱づとにとて、うら風に雲吹はれて長月の、ながき夜わたる月のさやけさ、或人もよめる、いづこにも露おく

袖をこよひしも、月にあかしのうらの旅寝は、さてしも濱風をひきの社にまうづ、けふぞ新なめ奉る日なりとて、いと賑はし、おそく詣でつれば、何わざもえ拜み侍らす、此廣前の松陰に、潮の涌くか如く人立こめて、叫びのしる、何ごとぞと見たれば、すまひが庭の、今ぞ手合せすと聞ゆ、この國のたぢから男は、けふくと待つかれたればきそひ立ち、西ひんがしと、百手つがひ定めたるへし、見る人もえいや聲をつくりて、おのれくが引くかたをたのむ、いといさましな、足よわきものは、岡にのぼり、木の枝にさがりてあやうげなり、あるが中にも、老たる人の、いとさなきものを背におひて、いかでく是見んとする、人ひしくと立並たれば、岩ほをさくに似て、いとけなきがいたう物おびえして泣く、いといたう危

うし、殘の齡いつまでとか、かゝる物見はする、此うま子しら玉ともかしづくらん、おしうたれば、いかばかりか泣まどはん、世に憎きものゝかぎりなりける、やがて事はてしよ、雲井とゝろく聲して、人立さわぎ、山も動き出る如くなるも、別れくゝに散行きぬ、それか中にけふのぬき出ならめ、勝ほこり、大路ふみはらゝかし、いとまうに、人おしわきゆく、ねるは誰が子どもことゝはまほしく、見る人も是羨むなん、いみじきめいぼくなりける、こよひ豆崎の宿にて、夜べの濱風名残なやましきに、此家のあげまきが、かたるものと、何ごとをかからがひて、聲高なるほどに、隣むかひなるも出来て、口々なるは、雨蛙のやうにて、あはれかたみに疵つきやすと、心ならねど、あつかひわざもよしなれば、さうと引たてゝこもりをり、いつしか心のかぎりいひはてゝ、別れくゝに打しづまりぬ、

よべもこよひも、ねられぬ草の枕なりけり、行きくつて、播磨の國
 何の郡とか、西光寺野とて、いとひろきあら野に來たる、行手百丁
 ばかりと云ふ、西も東も南も山立並て、目もはろくになり、行く行
 く稻葉そよぐ風も吹たゞず、小草花さき小松おひ、芝生がくれの澤
 水に、鳥どものうきて魚をくふ、此けしきえもいはず面しろし、雨
 いさゝか打そゞぎくるに、遠山は見るく雲立こめて、風まぜにふ
 りみふらずみ、人のいきかひもあらずなりぬ、色々の花ども、露を
 帶てうるはし、くらゝりんたう、をみなへしのなごりなる、よめが
 萩のはな、しら菊のよるぼひなからかんばしき、大和なでしこは濃
 からねど、時過したるがあはれなり、つゝじ花、あざみのかへりざ
 き、いひつゞくれば、春夏秋のくさくさを、花一時のながめしたり、
 尾花ぞしげくまねきあひたる、をり知がほにてなん、さるとりいば

らの赤玉かゝやかしけれど、取らばおよびやそこなはん、是かれ摘
 はやして、手つかにあまりぬ、あかずおもしろきに、立ぬるゝうさ
 もわすれて 雨そゞぎ風吹立て秋の野の、花のひもとく時は來に
 けり、家もあらなくにと、人々わびしがるにぞ、人里もとめて、盡
 の物くひなとして、出れば、日ははや西に傾けり、辻川といふは、
 市川のみなかみにて、いと大きなり、瀬々の岩むらに、むせび流る
 る水の音のすさまじきは、雨のやがてにやある、左右に山立なみて、
 眺めいとよし、嵐山、大井のわたりのおもかげよといへは、吉野川、
 六田の淀瀬にやと云ふ、いづれによするとも、鮎はこの頃くだりぬ
 らんといへは、あらず、この川なん生野の谷々より落くれは、かの
 山のしろがねふく氣のしたゞりには、たえてえすまぬと云ふ、され
 ばこそ、これが劣りたるといふ、館と云ふは、いともわびしき、山里

なり、家どもむづかしげなれと、暮はてしかは、こゝにとさだむ、
 打見しよりも、住たるさまよしめきて、よろつ心ありげに、粥なと
 もきようしてくはす、こゝをやかたと云ふは、誰殿の夢の跡にや、
 赤松山名の昔がたりあるへし、あると叫いで、もとむれば、只此國
 のからの殿の往しへこゝにとのみに委しからず、臥すへき所ははし
 の間なれば、山風吹入て、すゝる寒げなれと、望の夜の影あらはに
 さし入て、をのへの松風、軒端ゆく水の音にひゞきあひて、をか
 き旅ねなりけり、あかしのうらの夜あそびかたり出れば、或人、

浦波のゆたに見しよの月よりも、猶山里はのどけかりけり、波風
 こそたゝね、いとほるけうて、しづこゝろもなかりしと云ふ、いと
 をさなめきて、山ふところなる所は、月はやく見えずなりぬ、つと
 めて、雨の餘波の道芝露けく、身にしみておぼゆ、但馬の國に入ぬ、

栗賀といふ郷に、よき茶ありと聞て、其家にいる、寔や、仙虚と云
 ふ名は、懸まくもかしこき、はこやの山のかひより賜はせしと聞侍
 るには、道行づとにもとめて出づ 朝さむにめさまし草をもとめ
 ては、山路の露金おきてゆくなり、さて故郷いで、七日といふに、
 心さす所に來たる、なやと云ふ所より、かろき船もとめて漕れゆく、
 このあひだ、山も川も、元見したゝずまひながら、昔は春山の霞こ
 めたる空の氣はひも、己か齡も、いとわかゝりしほどなりき、今や
 二十年へし心には、朝たつ河霧の、おぼつかなさゝへそひて、古き
 をしのふ涙ぞ、秋のしぐれめきたる、江山皆舊遊とずんじつゝ行く、
 いにしへ堤の中納言の、こゝに湯あみすとして來られし時、夕月夜お
 ぼつかなきをとよませせし、二見のうらは、此わたりなりと云ふを
 聞て、ある人、けふいく日とりも見なくに玉くしけ、ふたみのう

らのあさ明のそら、それは播磨なるをこそいへ、往しへこゝに来る人は、難波津に船びらきして、かしこを経つゝ、加古の島など云ふあたりより、かち路をこゝには來ぬらん、所のさまを見るに、しか名づくべきにもあらず、見わたせば、霧のひま出る蟹舟の、かいさをとりくゝに、いづこにあさりすとかこぎ出る、いとすさまじき秋の江には、是ばかりにぎははしき詠もあらずなん、きの崎に來て見れば、やどりは昔ながらにて、もと見し人はあらず、たましく、君われをわすれずやと云ふを見れば、むかしの人なり、髪ひげまだらなる翁のかなたより、我をいかに淺ましとか見らん、あると云ふも、あげまきなりし人の、今はおよずけて、昔物がたりなどす、れいの局して住ます、故郷人もこゝに在て、とふらひ來たるにぞ、旅心地すこしわするゝやうなり、こゝにつどひたる人は、都なる

田舎なるも、男も女も、朝夕にとひかはし、馴むつびて、打みだりぬやなきは、かゝる世界とぞおぼゆ、むかひのつぼねに住む人あり、難波人と聞ゆ、四十餘りと見ゆるをんな君に、六十過たる皺ふる人ひとりかしづきたり、この翁、あるとにも來て、我たのめる人は、男君にわかれたまひて、三年こなた、いたうおもひくづをれつゝ、人に立まじり給ふをうたてきものに、山住などおぼしたゝせ給へりき、太郎子のなぐさめかねておのれにあつらへ、こゝにすかい出たせ給へる也、こといもあらばうしろ見させ給へといふ、何事をも承らん、うしろやすくおぼせとこたふ、此女いかさまにも世をうんとたると見えて、人に見ゆることをもせず、ひたやごもりたれこめて、湯あみなどをさくせず、よろづにつゝましう、操ある人とぞ見ゆ、かたちなどもかたはならず、ひたぶるになよびかに、やせ

やせといろしるく青みて、む月の半の梅の、垣根に散こぼれたらん
 にほひしたり、この隣しめしは、ならびの國の峰山といふ所の法師
 なり、よはひたかく、じちやうにて、いさゝかもみだりたる事なく、
 あしたゆふべにも、湯壺の中にも、阿彌陀ぶちの御名をとなへや
 ます、有がたきおこなひ人なり、湯あむいとまには此山にたゝせま
 す、薬師如來、觀世音の御堂を拜みめぐりたまへりき、ひたやごも
 りの君も、けふは物の氣のひまわりとや、此法師にいざなはれて、
 かしこにまうづ、道のほど、後の世のことなどまめやかに教へさと
 し玉ふに、罪とがの恐ろしとにや、くりことはてしなく問奉りつゝ、
 かへりて、しはふる人、何ごとにかあらん、いと腹あしく、すさま
 じきまなこつきして、このふた心人よ、いづこに中やどりやしたま
 へる、斧の柄今はすげかふべし、あの木のはしにすかされたまふよ、

さるわだくしさもしらで、こゝろのかぎり御宮づかへし奉るとの
 悔しさよ、今はやくなきおのれが、こゝに侍て何せん、たゞ今たゞ
 難波に出立ち侍らんとて、旅はゝぎとうで、いとあはたゞしく、
 聲しはがれ、ふるふく、おもゝちほてりたるに、猶鼻の先に、ひら
 柿ばかりのものはれあがりて、あかくついえたるにはてりまけたり、
 をんなおどろきまどひつゝ、あが君く、なにごとをかゆくりなく
 聞え玉へる、ふるさと出て道の空より、御心のうれしさを聞え玉へ
 るに、千賀の浦波よせかゝるこゝちしてひるまなき袖も、君が思ひ
 にほして日ぞろふるものを、むら雨すぐるばかりのいとまに、さる
 あだ浪のかゝるべきかは、すぢなきぬれ衣うちきせて、つひの世見
 はてじとや、あはつけくすて玉は、こゝの海にもいりね、あのほ
 うしいみじきおこなひ人なり、すゝなる物うたがひして、佛の御

罰かうふりたまはんと、御爲いとかなしきをとを、くとなく、あ
 の木のはしがかうべとりたりとて、何の報ひかある、ひく方に玉
 へるが、いよ、うしろめだきとて、あかき鼻いら、ぎ、蜂ふきたる、
 いとあさまし、此やどりなる人々、これを見き、て、みなあきれま
 どひて、やがてこの郷に、千名の五百名は立にけり、いとむくつけ、
 さるのちは人にもはひかくれず、おもなげにもあらで、たいひ、な
 たちならべたるやうにてぞ有ける、このをんな何ばかりの人ぞ、き
 ぬなどなれたれど、いやしげにもあらず、いつき子も持たりとや、
 けいしなども具し、うからやからも廣しとや、さる人々までいみじ
 きはぢあたふるなん、女ばかりゆるしがたかりけるものはあらじ、
 女はた此頃は目をいたくやみて、いふせくはれあがり、物などもつ
 やつやいはず、打ふしたり、氣の、ぼりたるにこそ、峰山の法師ぞ、

前の世のむくひにやと、打うめきをを、いといたはしきこと、云ふ、
 わかき人は、されどうしろめたくやおはすらむなど云ふ、かゝるは
 てはての國にても、人のものいひさがなさまよ、雨は時じくにふりて、
 日數へにけり、今日いくかぞと問へば、夜には九のよといふ、山お
 ろし梢吹ならしつ、おどろしく、幾夜ねざめがち也、山
 里は雨さへ夜さへ嵐さへよに似ぬうさのひまなかりけり、又おもひ
 つけて、いを寝ねは夢てふものも夜がれして、たよりほどふる
 故さとの空、は、そばのいかにさふくしくてやおはすらん、かう
 捨奉りて來ぬる罪かしこし、かなたにも山里いかにわびしからん
 ど、思ひおこせ玉ふべし、いとかたじけなきことを、こゝなる人と
 なげく、此ひとも打ながめつ、中空の雲のまよひにたぐへつ、
 たびねの袖は時雨ひまなきとぞかこつ、冬はまだきに、あられのた

したしと音して、いといたう寒し、夜べはみぞれなどもふりたると云ふ、物のおとも聞わくべからぬ宿なりけり、
 染もはてず散りもはじめぬ山陰に、はやくも冬のけしき立けり、かんな月に成ぬ、風吹きあれ、雨は夜ひるふる、日の影今はわすれにたりと人々わぶる、丹後の國の人のかたれるは、なべてこのならびの國は、西の風吹くれば、冬は必しもかくて日頃ふるなり、さなきだにも、雨は都あたりよりもおほくふるを、わたくし雨とはいひならはす、又雪ふれば、三さか五さかもふりつむといふ、聞くにさへすゝる寒しな、夜なか過るほど、雁の啼わたるを聞て、
 さよ中にかりなきわたる常世出て、つらにおくれし雁なきわたる、五日といふあした、からうして日のさし出たるを、影忘れし人々、立さうどきつゝ、山によぎて岡見やせんといふ、河邊に釣や垂ましといふ、心々にさだめか

ねつるを、あり磯の小貝ひろはんと云ふに、皆かたまけて出立つ、かぎりもなくひろき海の、雲と浪のけぢめも見ぬ濱邊に來たる、はやくの人の、雪のしら濱とよみし所と聞ゆ、げにも、まさではそれが降つみたるやうになん、里人は高野の濱とよべり、今日はのどかにて、海はたひらかなりと云ふも、よせくる浪は、山もこゝに動きくるやうなり、かゝるさかひは見ぬ人のみにて、たゞあきれにあきれて打望めり、しろき帆あまた見ゆ、此見るがうちに千さとや行く、雲に入ると見れば、又追ひくるが見ゆ、心玉しひもそらにたぐへゆくかと思ゆ、浦の神の丘にのぼりて、檜わりぞ小がめ取ちらして遊ぶ、此よする浪は、たゞこゝもとに打かけらるゝ心地す、れいの人に、いかにながむやと問へば、おそろしさに、氣のゝぼりてとのみに、物もいはず、
 天の原八重の汐路を吹こして、なごろ高野の

濱の夕風、浦人教ふ、此東にさし出たるをかしま山と申す、又あの
 黛なすは、鄰の國の經か岬也、是がさへて、猶其方は見えず、うし
 るなる山にのぼれば、西の方は、隱岐の島雲るに見ゆると云ふ、萬
 里の秋に驚くと云ひしは、かゝる境にやによほひけんぞ思ゆ、渚
 におりて、貝ども拾ふ、色々の染物して、世にもきようらなり、人
 皆あきなげにて、袂ゆたかにたてといはましをとつゝしりうたふ、
 老もわかきも、をさなごゝろしてくらべあらそふ、まくる人ひとり
 もあらで、いとかひある遊びとやいはん、わたつみのたむけの
 ちぬさ散みだり、渚に秋のにしきをぞしく、心地あしといひし人も、
 これに生出て、とめくれば雪のしら濱名のみして、千くさに玉
 の色は見えけり、こゝに驚かるゝは、蟻をとめら四人して、ちひさ
 き舟漕かへりたるが、やがておりつれて、この浮だからを、やすや

すと渚に引あぐると見しほどに、おほなく、荷ひもて来て、この眞
 砂のうへにおきすゑたり、浪のとりていねばかくはすなりとぞ、お
 へのすだきてなすにや、いとめざましくぞある、かへる山、七日の
 夜の月にさほひつゝ、くらぶの山路ならでこえく、いとさがしな、
 山高みあらしのうへに身をのせて空にさやけき月を見るかな、又
 の日の夕さりより雨ふりて、きのふなんうどん花の遊びせしと、人
 人喜びあへる、すむ軒のかへでのみぢ、夜のまにあさましう散は
 てぬ、山もはた、苔深き庭はもみぢの散しきて紅くゝる冬の山さ
 と、ゆふ月のおもしろきに、さゝの浦まであゆむ、こゝに庖丁が家
 あり、此樓のおばしまに時をかけてながむれば、山の影江に沈みて、
 水の面のをぐらきに、鷗の立ゐる聲々、釣舟のこぎてかへる、是や
 滿壁山水の堂と打ずんじつるにも、から歌ならはねど、水國陰山、

秀江村楓樹稀、日晡風浪湧、漁父收魚歸、俄に雲おこりて霞ふり、風もはげしう吹く、冬の夜は雲の絶間に月さえてあられ音あるさゝのうら風、月またさやかに、時雨も打そゞぎ、道のほどをかしき夜也けり、初夜過るより、吹かぜ家をゆすり、雨もあられもたいふりに降て明ぬ、木葉うく山下水の厚氷、心とけずも日數へにけり、又かくてのみ住みはつべくは山風の、はげしき音もうたてからましとぞおもふ、けふもおなじ空にて在わびぬ、十一日の夜、猶けしき立てさふくしきに、何くれの物がたりして遊ぶ、里人何がし訪らひ来て、いでや新らしき草はひ一つ奉らん、やがてきぞの夜のことなれば、我郷の者すら、此夕づけて承るを、まろうどのおまへに、おのれよりさきにかたれるものは侍らじ、さいつ日まうでたまふ、竹の濱に住て、いとまづしきものゝむすめの、まゆごもりにてある

が、この里の何がしが家につぶねする男と、いつのほどよりか、いとかなしういひかたらひけり、男時々かよひけるを、あるじの翁腹あしき人にて、聞付て、ゆるさゝりけり、さは心にもあらで、かれがれになりにけり、女いたう思ひわづらひつゝ、今は露ばかりのあだものを、あふにしかへばとて、いとさがしき山路を、母の前よくいひこしらへて、出立くる、春の夜の月の朧なるに立かくれて、亥の一つばかりに、からうじてこゝに來けり、男いとうれしうて寝にけり、短夜なれば、物らいふ程もなくて、おきて行くを、男おぼつかなさに、しりに立てゆけど、こゝらの坂路を隔たれば、かしこまでえいかで、山の手むけに手をわかちてかへりく、かくてぞ時々かよひける、いともかなしき契なりけり、さみだれのはれまある夜、れいのたどくしからでこえくるに、山のたむけ過るほど、草高く

しげりあひて、風そよげるよと見るく、いはほなりと見しもの、
 むくくとおきあがりて、こなたさまにむかふを見れば、あないみ
 じ、あなおそろし、大口の眞神と云ふものなりけり、あなやといへ
 ど、人げとほければいかはせむ、たゝわなくく、しりへにゐ
 ざるを、神ゆるすまじき眼つきして、くひつくとぞ見る、がぎりな
 りと思ひて、このまへにうつふし、額に手をすりあはせて、いとかな
 しき聲して、大神聞しめせ、生ての世に、命ばかりいつくしきも
 のはあらぬを、それにかへんものは、思ふ男にあふことのうれしき
 なり、蛭の子なれどたをやめなるを、神のしめ玉ふさがしきいは根
 ふみこえて、夜とも晝ともわかずいきかふなん、身をあたらしとに
 もあらず、されど道の空にてくはれんことの口をしき、男の許にい
 きて歸らんほど、しほし給へ、よき道だになきものから、明ぬさき

にこゝにまうで、必奉らん、神にてましませば、僞るともはたの
 がるまじきをと、國の守にうたへごと申すがごとく、なくくいふ
 聞入れたるにや、打ゆるび、くひつかんけしきなし、さてこそたふ
 とき御神にてましますれ、やがて奉らんとして、はひくもそこを逃
 去る、虎の口まぬがれしと云ふは、正しうこのよなるべし、さて男
 にあひて、このこと打出んには、はたますらを心して送らんに、う
 けひしことそむけりとして、男をもともにくらはんがいとほしき、た
 だなほざりにて、別れんをと思ひ定めて、又あふべきにあらねば、
 かぎりなりとおもふにぞ、さめくとなく、男いふかりてとへど、
 よくくねんじてあかさず、たゞ母のおもき勘當にのたまへば、し
 ばしはえこそ参らじ、さは浦よりおちにわすられなんとの悲しきこ
 と、涙とゞめかねたり、男、さることいかで思ひしるべき、あな

はかなげ、天の川瀬はへだつるとも、誰故にかみだれん、おのれひたすらに身をぬすみて、疎からず問ゆかん、そも遠からぬほどにと、いひなくさめて別れぬ、都の人ならば、あはれなる言の葉などもよみかはすべきを、さるものいひもしらねば、明ぬさきにと出たつ、女、こよひなん夢路たどるやうにて、なくく来る、心だましひもきえくなり、此たむけにのぼりつくに、かきけちて物も見えず、いかに聞わきつらん、いぶかしけれど、命得たるうれしさに、山をはやく、だりぬ、さすがに恐しうて、しばしはたゆるやうなりしが、猶はたえあらで、ある夜また出たつ、人に聞つることやありけん、あじかといふ物に、あざらけきもの、何やくれや取入て、かづきもて来て、かのためむけなる岩ほをはらひ清めて机しろとなし、このにへつ物をおきならべ、峯にむかひて、手をすりぬかをつき、ひとり

ごとけうけひごとするやうは、あが大神く、かしこき御耳ふりたて、きこしめせと申す、今まうつるは、親のたま物にあらず、寔に神の賜りし命なり、さきの夜の御徳には、何わざしてむくひ奉らん、まづしければ、いさゝかのたからも持たらず、此さゝぐるおほんべは、物のけがれなく、おのが心のかぎりなり、ねがふは御心をなごして聞しをせと、千たびぬかづきつ、こゝにこえて、さてれいの曉またでかへりくるに、取なみしもの残なく、茅籃のみぞ打散したる、いとたのもしうて、こん夜も又奉らんとて、躍りいさみつゝかへりく、この後はいきかひごとに、おきつ物のかずをつくして、かづきまうづるに、あしたは跡なくなんはたありける、こゝに竹野の濱のこなたなる、松本といふ里に、山賤のやもを住にてあるが、此女をけさうして、時々いひよれど、さるまめ人もたりしかば、いた

く綱びきて、一ことをもこたへず、山がついとつらしと思ひて、この女のかしこにかよふとき、ある夜、たむけの岩陰に待ふしたり、女かゝるをもしらで、れいの物かづきてこゝを過るを、山がつふと、らへたり、聞えつるといつまでとか、いとさがしきみこゝの、猶思ひたへがたくて、こよひさだかに承らばやと、あながちなるにぞ、こゝに人と云ふべくもあらず、うち／＼親のゆるせしにぞ、かうしのびにかよふところの侍る、君がおそきみ心に、今はいらへがたくなん、こゝゆるして通させ玉へといふ、こよひの關守いかで過しやらん、しひてもほるとげんとてこゝに待つれ、ひたぶるに心づよくは、命うしなひてんと、おそろしき眠していひおどろかしつつ、つよくとらへたり、命めすともいかでしたかはむ、あが御神あが御神、この仇追ひたまへと叫ぶ、山賤ことの心もしらねば、

猶しひ言きこえむとするを、此をのへより走りくるもの、ありて、山がつがこむらのあたりを、骨までつよく喰ひつきたり、あなやとさけびて倒る、女、あが御神と申す、山を逃くたる、山がつはむなしく喰ひつくされしとなむ、いとめづらしきかたりぐさならずやと、いと口とくかたり出たり、聞人みなおどろきあへるに、かれはたけきもの、中にも、ことにさがあしく、いとたのもしげなしとこそいへ、されば世をおし、るわる人のうへにたとへて云ふめるを、又かゝるも有けりといふ、あはれさるあしきたぐひのひとも、まげて打頼さんには、其爲にまめだちたるしわざもありとや、さりととも、其人ながくよる蔭ともたのまれがたくなん、昔欽明天皇の御代の始め、山城の國深草の里に、秦の大津父といふ人、あきものあまたつみもて、伊勢の國へ行く時、道に二つの神くひあひて、血に

まみれしにいきあひたり、大津父志ありがたき人にて、馬よりおりて、情しく此たゝかひをあつかひ、血にぬれしをまでぬぐひつゝ、引わかちやりしとなり、其頃帝の御夢に、此人なしのぼし給へと、神の告を見そなはしゝかば、國々にもとめて召上され、何の徳をかなしつると問はせ玉ふに、しらず侍る、たゞこの頃かゝるとなん侍りきと奏す、開しめして、それが報むかひしたるなりとしろしめして、大藏づかさめさせ玉へりしとぞ、斯るさがなきものも、我爲あしからぬには、かくむくひよくす也、まいて世の爲よからぬ人も、大けなく袖打獲はんには、あなたふとゝ陰たのむらんかし、されば大さ聖の君は、たかきいやしき、よきあしきも、なべて本草の花の咲にほへるを見そなはし玉ふが如く、うるはしきをめで、虫ばめるを切すかしなどしてこそ惠ませ玉ふらめ、いと有がたきみ心ばへならず

やといへば、人皆いみじがる、おのれぞはかせめきてをこがましかりける、雨はいよく降つゞきて、かしらさし出べくもあらず、あした、山の井のもとにきて見れば、雨ふかみけさは岩井の水こえて山下しづく音まさるなり、十五日は、うぶすな神のかんいさめする日なり、一さと立さうどきてにぎはし、れいは九月の九日なるを、其よひ八日の夜に、里人ども酔よち、いちはやくあやまちし出たれば、やがておほやけに召捕られけり、さるさはりにて、怠らせしを、けふなん行はせらる、午の時にわたせ玉へり、今朝より雨はれて、日の光さへそひたれば、きら／＼しく拜まれさせ玉へりけり、れいはみやびかなることゝも多かるを、こたびはつゝしむべきにて、何事もおだしくてやみぬとなり、神もおほやけにはけおさるゝことゝて、別當のいたう打うめかるゝとなん、山里びとはよる

づに古代にて、いと有がたかりける、いざよひの月いとよくみが、
 れ出たり、親のたまへりし日數、今はみちぬれば、猶やましさの名
 残あるにも、あすなん立出べきにて、宿の別れさへ今さらにおぼえ
 て、夜ふくるまで月をながめをり、冬枯の梢にかけて久形の、
 桂の花を軒に見るかな、つとめて宿を出づ、雨もひまある空なり、
 久美の入江に來たる、いとおもしろき所なり、れいの物おぢする人
 あはれがるは、波てふものゝいさゝかもたゝぬがうらやすしとや、
 蜚舟二人して漕出づとて、あなうたて、あの雲ななたゝ今ふりく、
 あはれすぐせなきわたらひかなとわびごとすを聞て、此心よわき人
 の、見るめにもまづぞ涙はさしくみの、入江にぬるゝ蜚ならぬ
 袖、雨猶なごりをしむか、追ひくるが如くにふりく、いとわびし、
 野中といふ郷の岡のべに、秋の色こく薄く、むら松の中に立まじり

たる、こも見過しかたくて、時雨には袖こそしほれもみぢ葉よ、
 風よりさきに我見はやさむ、柏木ならでも守ます神はありけり、天
 のはし立、まだ見ぬ人々のしるべして、この道芝はわくるなりき、
 あふちの嶺より、興謝の海ばらいとよく見ゆ、岩瀧といふ浦邊に、
 小き舟かりて、こぎわたり來て、此梯立の上をわゆむゝ物がたり
 す、この國の風土記に、興謝の郡はやしの里に、天の橋立といふは、
 長さ二千二百二十九丈、ひろさ九丈あまりとしるされたり、さてこ
 れを天の梯立といふいはれば、伊邪奈岐いざなみの大神、天のうき
 橋にたゝせまして、瓊矛もて、わたのそこをかきなし玉ひ、この國
 つちをつくりはじめ玉へりと云ふ、其浮橋の、天よりおちて、こゝ
 に跡留めしと云へり、むかしも來て、けふまた此崎のなれるかたち
 を見るに、さるいはれあるべき物とも見えず、こは人の力もて造り

なせる、今の世に陂戸とかよべる物よと見定めつるはいかに、はやくの世より事好むものゝ、かゝるおよづれごととして、世をまどはずぞかし、心あらん人來て見よ、石をたゝみてつめるさま、内海の有かたち、國の利にこそなしつらめ、又是につきては、天の眞井もここにありと云ふ、廿とせのむかしこゝにあそびしことあり、けふまた來るも命なりけり、ある人はいたうめで、
ふみ見んとおもひかけきや白波の、上にわたせる天のはし立、都なりせばとは、昔もねぎごとせし、うべもいひ玉へるはとあはれがる、さえのほどこそくらぶべからね、めゝしさのみはかはらざりけり、とかくこそいへ、こゝをおきていづこならんとて、
いくそたび松の千年もおひかはり、とこ波よする天のはし立、夕日の浦は、文珠師利の御寺のあたりを云ふとや、名のをかしさに、
おきつかぜさむき日ね

もすいざりして、ゆふ日の浦にかへる釣舟、西の方をば枯木の浦といふは、昔細川の法印このわたり領し玉ひし時、よしの山の櫻をうつし植させしが、其後跡なく枯朽しかば、さる名呼ひそめしと云ふ、花と人と共にむなしかれど、猶今の世にしのびまゐらする君なりけり、ゆく手の磯廻に、網引する子らが、えいやさらなどをかしき聲あはせて、たゞ細くりよする、いとめづらしみて、これ見はつべくたゞずめは、月出るまでもといふに、さまではいかでと、この腰うたげし石に、かいつけて立ちさる、
與謝の海や夕しほかけて引網の、つなでのゆたに物もひもなし、こよひ宮津にやどりて、有明月の夜でもりにこゆるは、この國にふたつなき高嶺なり、ふかうの嶺と云ふ、降來る雨にきほひつゝ分登る、たか興の中だにしどゝにて、登りはつれば、風に晴て、うさをさむさにかへてくだりて、こ

こに昔おにの住みしといふ大江山は、やへ山隔て、おくまりたる方に、しげ山高く見さけらるゝ、變化のあやしくおそろしかりしこと、源の頼光朝臣のたけかりしこといもを、物かづくものらが語りつゝくれと、耳留めてかいつくべきにもあらず、越てのこなたに、天照すおほん神の、岩戸でもりませし跡なりといふは、したゝかなる巖に、むせぶたき浪の音すさまじ、そのかみおほん神のおましの岩床なりと云へり、こゝも、てつけごとにて、たふとくもおほえず、神山のもみぢ葉今は散りつきしも、猶かつく見ゆるさへ、嵐にきはひて目もあや也、神かぜにいぶきちらして紅葉せし、山より冬はふかくなるらん、大神の宮居あり、又とゆけの大神もたゝせまず、社傳なりと云ふを聞ば、此國の鎮座をはじめと申せど、いぶかしきは、垂仁天皇の御代に、やまと姫のみこと、大神のしづもりますべ

き國もとめありきたまふに、近江美濃の國々を歴て、伊勢にいたります時、御神、姫みことに告たまはく、この神風の伊勢の國は、とこよの浪、しき波よする國なり、かたつ國のうまし國なり、この國にをらまくおぼすとさとし玉ふまゝに、もゝ船わたらへの郡、さく鈴いすゞの河上に、宮造りし玉へりしと云ふこと、日本書紀をはじめ、何くれのふるき文らに載ていちじるかりけり、又こゝのいはれは、延暦の儀式帳に見えたり、天てらす大神、真木むく玉木の宮の御代に、伊勢の國わたら會の宇治のいすゞ川のべに、大宮づくりしまし、後に、雄略天皇の、大みゆめのさとしかうふり玉ひて、丹波の國、比治の真名井が原よりうつらせまし給ふよしをしるされしかば、うたがひなく、こゝは豊食の大神の御跡なるべし、見わたせば、山ひらけ、川長くながれて、天の真名井が原てふ、いにしへをとゞ

めし國がたになんある、社傳寺記にしるせることゝも、國史古記録にたがへるが少からず、しかすがにぬさちらして、けふまでつゝみなかりしを、ゐや申奉る、福智山の宿のむつかしげさに、いぎたなき朝出しつれば、けさおく霜はわきて身にしみて思ゆ、よしみの竹田といふ郷は、家づくりのまことによしめきたるに、都とほからず思ゆるは、夜べのわびねの心づからにやあらん、こゝなる人の、物いふとはなしに、よしみの竹田すぎがてにすると、さゝやかに聞ゆるに、難波人芦火たく屋をしのぶにもとゝりあはずかいつく、右手の山にそひて、煙のたつがにぎはしく見ゆるをとへば、氷上の黒井といふ、この聞ゆる郷は、おやおほ父達の住みたまひし古郷と、かねて聞しものから、かゝるついでにつけて尋ねゆかましを、母刀自のいかに待わびたまふらんとおもひ棄て、こくりやらの坂道にか

かる、丹波の國にはふたつなき高嶺といふ、誰もく足なければ、かづかれてこゆ、又のあした、霜の痛くふれるを、れいの物わびする人、おく霜のしるきを見れば旅路へし、我なれ衣のいと物うき、肩のまよひも淺ましけれど、秋過ぬれば、つゞりさせとも聲せぬ、枯生の道を分迷ふにも、いと故郷のはるけさに、今一夜ふたよも、八千夜しふべきこゝちしてなむ

歌と云ふも言なり、ふみといふも言なり、事しわれは言に出る、是を言舉といひしがいにしへなり、其事のよろこびうれたきにも、うたふにあかずこちたきには、言をつらねてつばらかならむとす、是を文といふ、歌へど、事につきて長くもみじかくも、ことの數定まらぬがいにしへなり、歌垣たてゝしらべあはするには、春の鶯の囀に、あなたぬしとも人皆耳かたふくるよ、中とみのをらび聲、物まをしのによほひ、秋鹿のつま戀に、ちかきにたけく、遠きになしげなるものか、されば事おほきは言永はへて、あまとふ雁のつらつらなしては、蟬のたくつなゆるびたはめる、事少きには板屋うつあられの玉の聲、冬のもみぢの風の散かひに、彼も是もおのづかなるものとしられてこそ言はつらぬべけれ、ながきことろを短く、事すくなきをは長はへたらむ、ほとくかたきわざにしもあるが、

千さとゆく龍の馬も、あまりにおひ荷はせたらんには、あゆむにたふまじくや、から猫の毬ころばせてたはるゝ如くに、歌もふみもあそばめ、歌といふも言なり、文といふも言なり、いづれをか安きにおかむ、いづれかおろそけならむ、小車のふたつの輪、かたゝにして道ゆかんやは、言かよはんやは、言にあげてによほひ、言をしらべてうたふ、是を語靈のさきはひと、又こと玉のたすくるとも、いにしへ人はたふとひてなもいへりける、ほたる飛ぶ小草川のべにやどりする旅人云ふ、

都圖羅册子四

落葉 ある御方の御もとめに奉る

いにしへより、春秋に心々なることを、あらしみさまにいへるなん、いとものはかなけれ、をりにつけ事に臨みては、常あるべきことかは、我は春のあした、あきのゆふべにまされりといひし人は、そらに飛びたつ蘆たづの、まさ目のどけく、歌をさへいざなふよと見しなげきなり、花もひとつに霞まれてとよみて、秋の月めづる人々にむかひしは、めゝしからぬまけじ心のおどろかるゝなりき、秋山ぞ我はといひしをこそ、ひたふるにこめいたるさがとおぼさるゝなれ、又何某のおとりの、ことよくすかいたまへるをば、すぐゝし

き操もて、つよく綱びかせたまひし、こや秋に打しづもりませるか
 しこさよ、山がつらがあやしう常なき心には、まだわかうて、物の
 おはれ辨まへざるほどは、春の花の林、百千とりくの囀りに、深
 き山ぶみをもはらおほし立ちたるに、やうく物の心おほし知りて
 は、其かた怠りざまになりぬるを、老のはじめにて、人あまた立ち
 こみたる所は、けのぼり、心おちるねば、陰の休らひも、なげの旅
 寝も、哀ならず成んで、秋の野山にまじるかたをなんのどけうおほ
 えしが、かう老くだちては、また若かへるにはあらで夕べならぬに
 も、秋はたゞさふくしくして、今一たび春にあひて死ばやと思ふは、
 心のひたとおとろふるにこそ有けれ、此殿の御もてあそび草は、よ
 るづ老らかに、御よはひのほどには、似げなく打しづもりませば、
 秋にみこゝろをとめさせたまふなへに、おまへの庭の風のすゑに、

色よきをえらびとらして、うるはしきこしの國紙に、おしとめさ
 せしが、いともかたじけなく、かたる翁めしで、はしに物書べく
 おほせたらぶ、いみじくにほひなき言は、立田姫の思はんがやさし
 きを、さりとしていなみたいまつらん事のかしこさに、くらさまなこ
 見はたけて、朽葉一ひら拾ひとりて、かいつけて、さげたいまの
 る歌、

風にちるかるき

もみぢのいろくは千秋にあかぬ

君が御爲に

寛政十二年の冬、おまへに在て

つかうまつり侍りき、

十雨言

五日に一たび風ふき、十日にひとたび雨ふると云ふ、聖の御代のた
めしにぞ云ふめるを、一年すぐるほどのついでをしも見れば、む月
立て、人の心を春にあらたむるにはあらで、鶯のはつ音のおとづれ、
梅の南の枝にはほころびそむるところ見れ、山々に霞かゝれるも、夕
づけて風さえ、立まふ雲は猶冬の名残して、沫雪の梢どもにはつは
つかゝれど、土に落ては、つみがてになん見ゆるも、都邊は照日な
がらに、日毎うち散るを、山里いかならん、思ふもすゝる寒けしや、
其ほど過にては、木の芽春雨けふいく日ふり次て、野は、ふるくさ
に新草まじりて萌出れば、四つの澤水もやゝ満ぬべし、みよしの、
花にとて旅たつ人の、あまぎぬ打かつきて、散りや過なんと、心あ
はたいしく分のぼるぞわりなき、又たれこめてこもりをる人は、春
のものとながめくらしつゝ、酒あたゝめさせ、友なき夕べは、家刀

自呼びいで、くみかはし、あそび敵とすること、よそめもいとた
のしけれ、若きほどは、これをはぢらふさまなるも、中々になまめ
かしき、山もはた、おそきもはやきも、嵐にさそはれて、櫻の花は
ちりつきぬべし、夏の林の緑に染ますに、夕べをつぐる鐘の音さへ、
打しめるばかりにふるは、袂すゝしきはじめなりけり、垣ねのうの
花の、雪ならばなどや凋みくだつらん、短夜の月のあゆみいと疾き
やうなるに、小雨打こぼしつゝ、ゆく雲のかゝれるかと見るに、時鳥
の一聲鳴捨て、又遠方に二聲三聲、かすかに聞ゆるも嬉し、田子の
もすそのひぢりこにそみつゝ、早苗とりはやす、五月雨のはれまの
いそぎを、さとつゝきに、何とやら唄ひつるゝ、いと賑はしな、や
す川すゝか川などの岸のをちここに、あすやはるゝと、心の外の旅
寝する人、いかにわびしからん、みな月立ぬれば、峯なす雲の、夕

ごといたつも崩るゝも、天にますいづれの神のたぐみならん、蟬な
 く木かげのやどりに、汗をぬぐひ、岩まの清水を結びてあかぬ人の、
 行つかるゝさまなるに、風さと吹くる跡より、黒き雲の追ひしきて、
 降くるひら雨は、瓶にたゝへし水をくつがへすが如くに、御格子お
 るせ、簾よなど立ちさうどきつゝ、見たまへれば、大庭のしらまな
 ぶは、忽ち浅川の瀬に流れあひて、殿守のとも宮つこら、こゝか
 しこの御垣のくまゝにはひかくるゝなど、いとめざましな、落瀧
 つ瀬の水上にはしらぬ濁の、いはほをこえ、岸をくづしつゝ、みか
 さまさると見しも、たゞ片時に流れ落て、水陰草の露おもげになへ
 ふしなびきあひたる、けさよりのあつさわするゝ夕べなりけり、初
 秋の空に横たはりて、星の契へだつてふかたり言は、唐土人のまこ
 と偽はしらねど、文に書き、歌につくりてもてはやすを、こゝにも、

ならの葉のはやき昔より雨ざはりやすと、打まねび出たるはかなげ
 なり、大かたのとしなみを見れば、夏秋のあひだは、山田澤田水を
 そぎかねて、ことしの秋いかならんと、夜をひるにつぎつゝ、男ら
 立走り、池沼も小川も、あせはつるまでせきあぐる此頃、空に乞ひ、
 神にいのりつゝ、夜もいをねず、鐘つゞみの聲、里々といろきあひ、
 焼くかゝりのほかげは、をちかた野邊のくまゝをさへかくれぬも
 のにてらし、雨たばれなど、聲々によびのゝじる、かつはかなしく、
 かつはいさましげなり、やがておそろしげなる夕雲の、空に立みち
 て、降くる雨は、玉うちなどする音して、風吹そひ、林をゆすり、
 河波をあげ、とぶ鳥は翅を折られ、蛙の歌もしばしは聲なくなん、
 さは思ふにかなふけふぞとて、里ごと家ごと、千秋よろづ代をう
 たふたのしさよ、唐土にても、かゝるに、雨をよるこぶてふ文かき

て、世に寫し傳へし例もありき、風は野分こそかなしけれ、ながめと降かへては、いとさふくしき秋になん、八月十日あまりのそらの雲のまよひ、人の心をなやましうするよ、文つくり歌よむ人の、はらめることろをたがへ、酒くみ、舞あそばんのをかしわざも空しからめ、望の夜の更行くまでも、軒のしづくのつれなく音するは、誰もく思ひきゆらんかし、曉がたのおぼつかなき空に、雲間もりてきらくしき影をば、大かたの人は見ずてやあらん、立待居まちして見る月は、すこし虧そこなはれこそすれ、待戀し夜にいかでおとりなん、夜はいつにまれ、村雨過し名残の雲に、はかなくさし出たらん影に、垣根の草の露、玉とちり、しぐれとそげること、いともいともあはれとはなかめらるれ、打かはす雁の翅のひまもりて、木末に滴するばかりなるは、こや長月のしぐれの雨なるべし、山の

色のはつかにそむると見るに、こかしこ山めぐりしてふる雨は、すいろ寒げなり、かむな月の雲のけしき、宮古も田舎もおなじさまにはる、日なきは、これや時じく雨のよしなるを、其頃すぎにては、みぞれとふり、雪あられとこりて、枕をおどろかし、窓のもとに夜ふくるまでふみよむひとの、心すさびをもよほすなん、いとあはれとおぼゆる、戀する人ばかり、時をもいはず、いつの夜もく、これがさはりをかこてるこそ、いともなきめかしう、かつは物ぐるほしからめ、この心ひとつは、老がわか、りし昔より、露も思ひしらぬかなしみなりけり、

其二

冬は年の餘り、夜は日の餘り、雨は陰のあまりなり、文讀む人は、此三のあまりもてなると云ふ、かたり言にはいへど、老がたぐひの

おろかものは、たゞいたづらに、埋火に炭たきつぎ、春の木芽を煎つゝ、飽ずすゝろひをるおのれは、何をして齡たもつらんとはおもふものから、まなこ暗く、齒落つきて、何をかよみ、なにをか語らん、雨をなつかしきものにするは、家とみ、人多くもたりて、賑ははしきあたりにも、友垣のとひくる道をたえ、家の業などもさへられて、宿にのみこもりをり、文をよみてはいにしへをしのび、鳥の跡はかなう書すさび、或はいつきむすめに琴かきならさせ、酒あため、よきものとりなめて、日ぬもす、夜すがらならむ、いとたのしき、あしたよりおきいで、夕暮過るまでも立走りても、たつるけぶりたえぐに、人の情をだにうくるよしなきものらは、たゞ打らめき、つら杖つきて、つれなしやこの雨とながめたらん、いとはかなし、やどりなきかたるものらは、こゝかしこの軒、木陰などに

くいまをり、むさき髪かきなで、ふたつの乳、ふたりの子にふゝめて、難波すが笠破れたるを打かづき、空さしあふぎては、けふをいかにせんとわびしがるさま、いとかなしき、高き御わたりのありさまはおもひかけねば、おぼし知られぬを、祭の日、馬も御車も、なべて雨衣打かづけ引出たる、けふの御使さねをはじめ奉り、歌づかさ、御隨身、小舎人、わらは、仕丁などにといたるまで、大かさめせきにかくれかねて、しとゝにぬれつゝ、脛たかくかゝげて、あゆみなづめるを、これ見るとて出たつ人も、けふはいとすくなく、さふくしげにて、かいつらぬ出給はんを、見るめのくるしげに、あへがたうも見奉らぬ、いと心ありや、東路なるわたり瀬の、高浪をあげ、岸をこえては、國の守のまゐりまかれるも、わりなくさへられては、ものゝふのたけきこゝろも、たわやめにうみつかれ、千さ

とゆく駒も、鼠のごとくつなされるたる、何もく無徳にこそ見ゆ
 れ、人またぬ家には、若き女どもまどゐして、古代の繪ども巻かへ
 しつゝ、あるは石はじき、へん次、貝あはせなどして遊ぶ、かゝる
 夜にこそ、ぬす人どもはたよりよしとや、下ゑみしつゝ、打入らめ、
 あはれく、老がまづしき庵には、ほしきものもたらねば、かれら
 入てぬすまんとせせず、燈火かゝげあかし、文よみ、手ならひはか
 なう書すさびて、あかときしらずおきあかしたる、昔のしのばしき
 は、林にやどる目なし鳥の、今の身のうきことになん、

花 園 題上田耕夫東山第

その、花々に戯れて、あかぬさまなる胡蝶の、眠をおどろかして、
 蜂といふむくつけものゝ、いと腹だゝしげに、いぶきちらしつゝ、
 飛來て云ふ、いにしへの世には、南山の蕨東門の栗、おつる梅、そ

の實いくらなど云ひて、淺はかに花の色香をのみなつかしめる例は
 なかりき、世うつり、人の心あだくしければ、眼を青くし、鼻を
 さがしがるこそ、うたてめゝしき心ざまなれ、おのがともはしから
 ず、昔の陶隱居がまめ心をまなび、憩きを吸ひもくらひもしつゝ、
 腹みたんことをつとむるなり、汝はかは蟲のおそろしきよりなりた
 るをわすれ貌に、今のかたちのなよびかなるにほこりて、人の目お
 こせたらんことをつとむるよ、あなつらにくと云ふ、蝶は長き袖た
 れて、いとも聞にくしかし、人とても、このめる道に名を揚げ、そ
 しりをもゝとむとや、ましてあなづらしきおのがたぐひの、さるわ
 きまへやはある、たい心のすゝめるかたにたはふれて、命生んには
 しかじ、何がしか聞えしねぢけ人を、口に蜜して、心にはりあり
 とたとへしは、誰が上ぞや、さわれ、誰々も親のうみて玉ひしまゝ

なるをいかにせん、物とがめしていたくなさいなみそとて、彼方の枝にうつりぬ、木末の小鳥どもの、このことわりをうべくしとにや、花に實に、おのがこのめるかたに、あかれくにいきぬ、花にあかぬ人の家には、鳥蟲さへもあかぬ遊びして、争さなることはすなりけり、花ありて住やはつきしすみつきて、うつしや植し

山本の庵、また此頃、栲亭源子の愛花人の詞を見せらる、其詞、

野史載大江佐國者性太愛花嘗有六十餘回看不足他生定作愛花人之句沒後其子某夢父來告曰我今化為胡蝶每春遊于花園某不堪感慕多種花木塗蜜于花房以供養群蝶云其事極奇而詩不見全扁因竊補之續以後事命曰愛花人詞

一花看損一花新占斷百花領九春六十餘回看不足他生定作愛花人他生不待更爲人蛺蝶居然是後身歲々化成千百億醉芳翮了前因

前因方丁舊園花花作寢牀香作家昨夜分明來入夢不知何蝶是爺々聚芳迎蝶意何深手取蜂糖仔細淋休問恩情知也否這般難得憶親心迷惑三生芳樹霞癡心未必笑他家即今我亦值華甲花已滿園又買花このことまこといつはりをするべからぬど、誰采出てむかしをしのぶ人もなかりしに、君常に花めづるさがおはせるには、相憐みて、この詞はつがるゝなるべし、さはおもひをやるほど、我や蝶やのふることの、香を嗅ぎ、露をなめつゝ、花にこゝろをあそぶらん、我もこれにいざなはれては、夢に入り現にはまた身をかへて春は胡蝶と花につげゝん、それとだに親のつかへをたのめては花の日數の惜まるゝ哉、開元遺事に、明皇宮中春宴令妃嬪插艷花帝親捉粉蝶放之隨蝶所止幸之楊妃專寵不復此戲

花に驕る君が加ほよを憎してふ翅の風にうちてゆくらん、
 手に摘ば床しき袖の色につくこや粉てふとて人の愛らん、
 新撰字鏡といふ文に、蝶をかはひらごと讀たるを、和名抄には、蛾
 をひいと見えしが、東にては手ひら子と呼ぶとも聞し、蛾は蝶の
 小さきを云ふとなれば、ひとつ物にてぞある、堤の中納言の物語の、
 蟲めづる姫君の巻に、かは蟲の恐しきを手にすゑさせ玉ひて、蝶と
 て人のめづるも、是がなるなり、よろづのもの、其をはりをまで見
 はて、こそと見えたりき、さは鳥毛といふかはむしのなれるもて、
 かはひらごとはよぶか、しかすがにこれのみにはあらで、園蔬の葉、
 三つがふたつは蝶となる、故に字は葉にしたがふと云へり、又鳥足
 といふもの、根は鱗鱗となり、葉は蝶となれりとかや、又百合の花
 かならずなれりと云ふ、猶さまくにくげなる蟲のなりかふるを、

昔の井中住に見たりき、又蟲や木草の葉のみならず、人もなるなり、
 莊周大江の翁もこれになりたるなりけり、その佐國といふ人は、
 御堂の關白どの、仰ごとたうびて、萬葉集をよみて奉りしとも聞侍
 るには、此集よみふける我も、あやし、死ては人の園にや遊ぶべき
 と、いとはかなき思ひこそせらるれ、

さまくくに色ある衣の袖はへて戀すてふとや花にたはる、

年 木

とし木こりつむといふことをよめる 唯心尼

たき木こる峰の手斧のおときけばほどくとしもくれはてぬ
 めり

あらず玉の年をおくりむかふるわざこそ、千年のいにしへ、今のうつ
 つ人も、かはらぬよるこびはすなりけれ、春のまうけ、つかさく

の衣はかまの色あひ、ゆほびかに、あらたならんがめでたし、民草も
おのがほどくにつけて、染ぬひする、めでたし、貧しきは解あら
ひてうずるいそぎのあはれながら、そもよろこびする心ばへなん、
おろそげならずめでたし、よね積はえ、もちひ臼づき、海のもの山
のもの、何くれとおくりかはす、あかずたのしき、おはら賤原、大江
山いく野の道を、都にかづきもてはこふ年木のにぎはしきを見れば、
蜀の山兀たらんといひしをさへおぼゆるかし、此あるじなん、今年
五十のよはひを、事なくつゝみなくて、このとしもくれぬるを、悦
びのあまりに、まろうど設くべき新室二間立そふるとて、手斧つち
の音いと賑はしく、加茂の河瀬のあまびこに呼びつたふること、年
むかふる中にはことにはえくしきを、待つことなき翁さへ、打系
みさかえ、いともたのもしうおもふたまへらるれ、むな木、うづば

なるなる
原本誤寫

り、柱、簀の子の板荷ひ入るを、工みの長がおもひがねに造りたる
わざの、いともかしこき、もろこし人の、不材の木天年に終ると云
ひしを、ことわりなるなるものに思ひしめりしが、今おもへば、あ
はつけきいたづらごとなりけり、其ねぢけゆがみし木も、はた斧に
くだかれては、御釜木をはじめに、賤が朝夕の煙にたきほろぼさる
るを思へ、和泉の柚がひきたつる宮木はもとよりなん、今この造る
家居の新しきが、子うまごの裔のすゑらまで住ふわたらんを、何か
は命短かきといはん、打出て見れば、山づみのゆるさぬ谷峰もあら
ず、こりくたき、かづきつれて、都にもてはこぶを見よ、不材の木
の天年をまたぬことまたかくの如し、此新室のついたつる柱は、あ
るじが心のふとしきなり、千木系つりのしげきは、あるじが心のに
ぎはひなり、かくつくりたてゝは、幾春をか迎ふらん、迎へて先到